
白い少女と異世界の魔法使い

紺乃 惺爛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い少女と異世界の魔法使い

【Nコード】

N3368V

【作者名】

紺乃 惺爛

【あらすじ】

主にFate/extraと魔法先生ネギまのクロスオーバーです。あとFate/stay nightもちょこちょこ出てきます。

月の聖杯戦争で生き残った主人公がサーヴァント二人を御供にネギまの世界で生きていくというものです。

ガールズラブ有り、原作一部ブレイク、主人公チートなどなど。

序章 白い少女 (前書き)

はじめましての方もそうでない方も。
楽しんで頂けたら幸いです。

序章 白い少女

私は聖杯へ願いを伝えた。

そうして聖杯戦争は終わった・・・はずだった。

本当ならば私が中枢にアクセスした時点で消えるはずだった。
なのに何故か私はまだ生きて、この無限の情報海の中を漂っている。

神の自動書記装置

ムーンセル・オートマトン

そう呼ばれた聖杯を巡る戦いに巻き込まれた私は、生き残ってしまった。
った。

幸いにも良いサーヴァントにも恵まれ、友人も得た。

そういえば、彼女は？

私の剣となり、盾となって戦ってくれたサーヴァントは？
なまえは・・・もう思い出せない。

大丈夫なのだろうか。

友人は・・・？

大丈夫なのだろうか・・・？

・・・いや、大丈夫と信じよう。

しかし、私の意識は流されていくだけで消滅する気配はない。

流されていく？どこへ？

いや、もはやどこでもいい。

終わるなら早く終わらせてほしい。

せつかくの覚悟が鈍る。

原初の願い。

「生きたい」

という願いによって。

はやく、はやく……。

『そう、無理をしなくてもいいんじゃないの？』

声が聞こえた。

誰だろう？サーヴァントの声ではない。

『ひさしぶりね。といつても覚えてないと思うけど』

だれ？

目の前に居る白い少女は懐かしく感じるのに全く思いだせない。

『私は聖杯。^{イリヤ}』

彼女はクスツと微笑むと先に続ける。

『それにしても、本当にお姉ちゃんに“成っちゃった”のね』

彼女のいうことはよくわからない。

私は・・・女だ・・・

『それは、このムーンセルに招かれてからでしょ？』

わたしは・・・

『まあ、お姉ちゃんイリヤの存在定義とか性別とかは後にするとして、どうする？この後。聖杯イリヤなら、お姉ちゃんイリヤの願い簡単に叶うと思うよ。まあ、聖杯イリヤの力にも限界はあるから、同じ場所に戻すことはできないと思うけど。』

彼女が何を言っているのか解らない。

わたしは・・・わたしの願いは・・・

『もう、お姉ちゃんってば、相変わらずなんだね。いい？お姉ちゃん。ちゃんと説明するから、しっかり聞いてね？今はたぶん聖杯イリヤのこと思い出せないと思うけど、思い出した時の為に覚えておいてね？』

雪のような少女は紅い瞳を輝かせ、いかにも楽しそうだ。
えへん、と彼女は胸を張って解説してくれた。

『私はムーンセルの中に記録された過去の聖杯イリヤ。でも、聖杯ムーンセルの中に聖杯わたしって、ただ、魔力の区分けをしているだけで、意味が無いとは思わない？』

確かに。
聖杯ムーンセルの中に別の聖杯彼女があってもそれは魔力を区分けされている状態でしかない。

『だから、聖杯わたしと聖杯ムーンセルは混ざり合っている状態。そうすることで、聖杯わたしの中にパンパンに詰まって、人格さえ消してしまっていた魔力は、大きな器と混じり合うことで、聖杯わたしの中にためておく必要はなくなるわけでしょ？わかる？』

たぶん、大きなボールの中に小さなカップがあって、小さなカップはもう限界まで水が入っていた。
けど、大きなボールに水をこぼすことで小さなカップの負担を減らすことが出来て、別のものを入れることが出来る？

『そうそう。そんな感じ。大きなボールであるこの聖杯ムーンセルにはまだまだ余裕があったからね。』

うん。それはわかった。

じゃあ、なぜ君がここに来たの？

『それは簡単だよ。私は、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンはたった一人の兄弟を助けに来たんだよ？』

兄弟？誰が？

『お姉ちゃんの事だよ？』

え？・・・え？

『思い出せないなら、無理に思い出さなくていいからね。』

白い少女はスーツと音もなく近づいてくる。

『でもね、これは覚えておいて？お姉ちゃん。お姉ちゃんは正義の味方にならないでね？』

せいぎのみかた・・・

心に引つかかるものがあった。それは。だれかのユメ・・・いや。わたしの・・・？

『はい。考えるのはとりあえず置いておいて？』

少女の顔がすぐ近くに迫っていた。

思考が引きずられる。気を抜くと、その紅い瞳に吸い込まれてしま

いそつだ。

『お姉ちゃん。お姉ちゃんにはこれから、魔法使いたちが暮らす世界に跳んでもらうからね?』

魔法使い?それは魔術師ウィザード?それとも魔術師メイガス?

『これから行く世界の人はそのどちらでもないよ。ただ、お姉ちゃんには魔術師メイガスと魔術師ウィザードの両方を持ち合わせているから。好きな方をつかえるから。最初はたぶん戸惑うけど、そのうち頭の中にスイッチが出来ると思うよ?』

私の目をジーツと見つめながら少女は続ける。
本当に吸い込まれているよう。

『いい?お姉ちゃんには私の体をあげる。もともとはホムンクルスで弱い体だけど、聖杯わたくしと聖杯ムーンセルが繋がってる。つまり聖杯から魔力は無尽蔵につかえるようになるよ。この体はムーンセルの記録の再現だから、老いることはないと思う。』

少女は私の両腕をつかむ。すぐソコに少女の顔がある。

『ごめんね?本当は元の体に戻してあげたいんだけど。それが出来ない。お姉ちゃんを守る為にお姉ちゃんのサーヴァントも一緒に送るから。』

ううん。俺わたしはここまでしてもらってうれしいぞ。イリヤ

『おにいちゃん・・・?』

少女は戸惑う。

え・・・？いまの・・・？

『私に引きずられて昔の事を思い出しそうになってきたね。そろそろ、お別れしないと、お姉ちゃんの定義が崩れちゃいそうだから。お別れだよ。』

ま、まって・・・！！

『最後にお姉ちゃんの本当の名前を教えてあげる。衛宮 士郎それが、お兄ちゃんの名前。』

えみや・・・しろう・・・

『じゃあ、さようなら。次は幸せになってね？』

そういうと彼女は私の唇にそっと口づけた。

私の意識は急速に引っ張られ、そのまま意識を失う。

私は・・・

序章『白い少女』（後書き）

やっと書きたかった二次創作をかけます。

こちらはオリジナルに比べると更新は遅めになると思います。

キャラプロフィール（前書き）

お気に入り200突破の記念としてキャラ設定を上げときます。

正直、200は無理だと思っていたのでめっちゃめっちゃうれしいです

しかし、これをバラすと後の展開読まれそうで怖いっす。

キャラプロフィール

まず、スキルの見かたを書いておきます。

これは作者なりの解釈が沢山に入っているのでソコを理解してもらわないとナンジャソレ!!みたいになるかと。

+が4つで英文字1つ分

英文字4つでランクアップて感じですよ。

つまり

E+++||E

EEEE||D

みたいな?

最高はEXでその次がAAA++という感じですかね?

EXは最高ランクでそれよりすこし下がAAA+++って感じですよ。

なかなか説明が難しいのですがわかって頂けると幸いです。

名前：イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

身長：154cm

体重：46kg

スリーサイズ：82、60、84

イメージカラー：白

ムーンセル
月の聖杯に記録された冬木イリヤの聖杯の体を得てネギまの世界に来た主人公。

聖杯の恩恵か色々な能力を持っている。

冬木のイリヤを16歳位にしたような体格。なかなかに発育が良い。元の魂がエミヤシロウなため料理などは得意というか好き。しかしその頃の記憶がない為、性格は別人。

保有スキル

筋力；E+：当然ながらイリヤの体なのであまり力はない。だが自分でも自覚している為鍛えているようだ。

耐久；EE：耐久は若干気や魔力で緩和できるので筋力よりはある敏捷；C+：魔力ジェット無しの状態での計測。魔力ジェット使うとさらに上がる

魔力；EX：聖杯による魔力供給があるので、門ゲイトもしくはパスを開けば無尽蔵に魔力が使える

幸運；C：幸運は今の所Cという感じだ。イリヤの体になって良かったことかもしれない。

対魔力；AA：魔力が跳ね上がっているので同じく対魔力も上がっている

単独行動；A：アーチャーの能力を引き継いだ。というかあまり関係ないかもしれない。

千里眼；EX C：月の聖杯のおかげで未来予測が出来るが、使い方がわからないのと、面倒くさいという理由で使ってない。視力強化くらいしかない。

魔術；C：イリヤの肉体のおかげパート2。魔法は少し仕えるようだ。

執事；B：女性化しているので執事スキルはランクダウンしている。主婦；AA：女性化しているので主婦スキルはアップしている。

メイド；計測不能；メイド服着て、「お姉さま・・・」とか言われてみたい。ハアハア（*、*）WWW

宝具：月輪の侵食

七天の聖杯

この二つは、ムーンセルを使った大魔術で、固有結界と似て非なるものである。

個々の固有能力は以下別に表記する。

早い話が固有結界以上のチートつてことです。

ちなみに、普段イリヤが使ってるインストールとか投影はこの二つの劣化バージョン

【七天の聖杯 Seventh Art graph】

ムーンセルの月海学園に敵の魂ごとを取り込む大魔術。

ここでは英霊であるセイバー達の力を強化でき、自分で作り上げた

SE・RA・PHなので自分たちに有利な設定し放題。セラフ

そして、ムーンセルの記録にある兵器、武器、防具から人物まで呼び出せ使役できる。

どちらかというところ1対多数向け。

この兵器や武器を呼び出せるのが劣化して、イリヤの使う投影になっている

【月輪の侵食 Erosion tha Ring around the moon】

ムーンセルの中枢のあるあの棺の部屋を現実に張り付ける大魔術。

セイバーの宝具が書き加えるもので、アーチャーの無限の剣製が塗り替えるもの。

その二つとは違い、現実に一時的にかぶせて張り付けるもの。

ここでは、セイバー達の力は少なくなり、自分対相手の1対1向けの戦闘場の

ムーンセルの記録にある兵器、武器、防具を呼び出すことが可能。もうひとつ特徴があるとすればこちらでは、自分が英霊になる事が出来る。

たとえば、李書文などの体術をインストールし、扱うことが出来るが、1人ずつしか使えず、自分自身のスキルアップするわけではない。

つまり、ヘラクレスをその身に降霊させたとしても、筋力や敏捷値が上がるわけではない。

結局は体術と武器の召喚だけだ。

ちなみに、この劣化バージョンをイリヤはインストールと呼び外でも使っている。

キャラクター

真名：玉藻の前

身長：ご主人様にしか教えません

体重：乙女の秘密です

スリーサイズ：呪殺しますよ？

イメージカラー：紺とか狐色

冬木^{イリヤ}の聖杯からイリヤを護るため送り込まれたサーヴァントその1
ヒロインの一角。

作者的にはピンクのIN-RANに見せかけての一番のお腹が真っ黒キアラと踏んでいたのだがいつのまにかハイテンション空廻りキ

ヤラのような？

ご主人様ラブだけど、セイバーさんのことも少し認めつつあるやさしい狐こ

あと一つ殺生石の開封できれマジやばキャラになりそうな予感が・・。

保有スキル（キャス狐に丸投げw）

筋力；D：女の子ですが狐なのでなかなかにあります。

耐久；E：最高級毛皮のモフモフが緩衝材になってますwww

敏捷；C）A：人状態と狐状態で大きくかわります

魔力；EX：そりゃ、ご主人様に魔力でかなうのはわたしくらいじゃないっすか？

幸運；A：天罰落とせるカミサマですからね）

陣地作成；C：陣地というか、新婚所帯をつくるならEXですけどw

呪術；EX：呪術は私にかなうのは誰もいませんって。

変化；A：あんまり好きじゃないのですが、ご主人さまが喜んで下さるのでよく化けます

神性；B：天岩戸にこもってましようか？

魔術；B：呪術とちよつと似てるんできちやいます。私って天才w

宝具：水天日光天照八野鎮石

鏡、玉藻鎮石といわれる神宝のなかの神宝を一時的に解放したものの武日照命が持ってきたというもの。

記述によると朝廷の要請で出雲より持ちだされ、後に河内でまつられた。

おそらく後の八咫鏡、すなわち天照大神の御神体

また物部の十物神宝の原型とも考えられ魂と生命力を活性化させる力を持つ。

本来なら死者蘇生までできる冥界の神宝だが、細かく飛び散った破

片の中にその辺の知識というかが入ってたらしく、今はその力が使えない。

セイバー

真名：ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクス

身長：余の芸術的な肉体は数字に置き換えられるものではない

体重：余の肉体を数字であらわすことなど出来ぬ

スリーサイズ：どこぞの青セイバーよりは良いぞ

イメージカラー：赤、金

冬木の聖杯からイリヤイリヤを護るため送り込まれたサーヴァントその2
ヒロインの一角。

作者的に甘〜いデレデレキャラにするつもりである。が、最近デレがひっじょーに少ない気がする。

数少ない前衛オンリーキャラ。（イリヤは前も後もイけるし、キャス狐は後オンリーなのに・・・）

なんとなく、エヴァとキャラ被りしてしまいそうだと思うるのは私だけ？w

保有スキル

筋力B：仮にも剣士であるからな。これくらいはないとな

耐久B：うむ。余は多少の事では倒れたりせぬ。強いであろう。

敏捷C：素早さはまあまあだな。余は芸術とあればすばやいぞ。

魔力D：魔力はあまり持つておらぬ。余は皇帝故魔力など無くともなんでもかなったからな。

対魔力C：セイバークラス補正というのが掛っているらしい。余自身のだともっと低い。

皇帝特権EX：うむ。余は皇帝だったのだから。当たり前だ。

頭痛持ちB：母の負の遺産だな。でも怨んではおらぬ。

騎乗A：もちろんだ。馬だろうがなんでも乗りこなして見せる。

アエストウス・ドムス・アウレア
宝具：招き蕩う黄金劇場

生前の彼女がローマに建設した黄金劇場を魔力によって形成、再現した、自己の願望を達成させる絶対皇帝圏である。

イリヤの月輪の侵食とも、アーチャーの無限の剣製とも違うもの。

月輪の侵食は空間情報を【貼り直す】ものであり、無限の剣製は空間情報を【書き換える】ものであり、招き蕩う黄金劇場は空間情報に【書き加える】もの。

この3種は全て似ているが全く違う固有能力で、それぞれが大魔術である。

以上3人のプロフィールでした。

キャラプロフィール（後書き）

どうですか？

テラチートっすよね。

イリヤ負けるわけがないかと思ってます。

でわ。感想とかもらえると嬉しいです

第一章 く出会った少女く（前書き）

どうも、暑い日が続いておりますね。

キャスターとセイバーの掛け合いが書いてて楽しいです。

読者様にも楽しんで頂けたなら幸いです。

第一章 く出会った少女く

【side ????】

私が目を覚ましたのは森の中だった。

森の中なのに、安全なのが分かる。

目を覚ますと目の前には狐耳の女性と、金髪の女性がいた。

「ご主人さま、大丈夫ですか？」

「奏者よ、ケガはないか？」

「ちょっと、そのアナタ、気安くご主人様に触れないで下さいまし。」

「む！そなたこそ余の奏者に触れるでない！！」

「まー！！なんて凶々しい！！この方は私のご主人さまです！！」

「何をいう！！余の奏者だぞ！！余と奏者はパスもすっかりつながっているぞ！！」

あの一、お二人さん。とりあえず、私の上で喧嘩するのはやめてもらっていいですか……？

・
・
とりあえず、二人を納めることはなんとかできた。
ムーンセルから出てきたのはこの場に私と、私と後の二人の三人しかいないワケで。
協力していくしかないと思う。うん。

「とりあえず、二人とも、名前教えてもらっていいかな・・・？」

「「ご主人様（奏者よ）もしかして、私（余）の名前をお忘れに忘れたのか！！」」

あー、両側から叫ばないでください。

耳がキーンてしますよう・・・；

「ごめんね・・・私もすこし混乱してて、思い出せないんだ。」

そう、あの白い少女に逢った所は覚えている。

沢山の話聞いたのも覚えている。

ただ・・・

『それは簡単だよ。私は、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは
を助けに来たんだよ？』

『でもね、これは覚えておいて？お姉ちゃん。お姉ちゃんは
にならないでね？』

『最後にお姉ちゃんの本当の名前を教えてあげる。そ
れが、
の名前。』

霞がかかっている・・・いや、意図的に隠されている気がする。

『思い出せないなら、無理に思い出さなくていいからね。』

白い少女の言葉が頭に浮かんでは消える。

そう、思い出せないなら無理に思い出さなくていい。

「ご主人さま・・・？」

「奏者・・・？」

「ごめんね・・・二人とも。」

「わ、私は構いません。ご主人さまに忘れられてしまったのは少し悲しいですけど、私良妻狐はそれぐらいでご主人様を見捨てたりいたしません！！」

「余もそうだぞ！！それに、余と奏者の絆はそんなことで無くなるほど細いものではないのだ！！」

二人はとても優しい。素直に打ち明けて良かったと思う。さて、自分の名前さえ思い出せない私。
手っ取り早く二人に聞いてみよう。

「ありがとう。ねえ、二人とも私の名前ってわかる？」

「え・・・？ご主人さまの名前ですか・・・？はい！！それはもち・・・ろん・・・？・・・あれ・・・？」

「ふん。所詮狐、物覚えが悪かったと見える。いいか奏者よ。奏者の……あれ……?」

どうやら、二人も私の名前が覚えていないらしい。

「申し訳ございませんご主人様!! 私ともあるうものがご主人様の名前を失念してしまうなど……!!」

狐耳の女性は頭を地面に擦り付けんばかりに土下座。

マジ土下座初めてみた……結構引くかも……。

「すまぬ、奏者よ。余も、奏者の名を思い出せぬのだ。」

金髪の女性はなんか、子供みたいにしょんぼりしてしまった。なんか二人に悪いことした気分。

とりあえず、あの白い少女の名前をもらっておこう。

「じゃあ、とりあえず、私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって名前を使うことにするよ。」

「ご主人様、つかぬ事をお聞きしますが、その名前、どこで得たんでございましょうか?」

狐耳の女性はなんか、ムスツとした感じの表情で聞いてきた。

金髪の女性も同じような表情してるし……。

「あのね、あのムーンセルの中で、私をお姉ちゃんって呼ぶ女の子に逢ったの。その子は……」

あのムーンセルの中での出来事を覚えている限り二人に話す。二人は黙って聞いてくれた。

「ふむ、余のいなくなった後にそのような事があったのだな。その聖杯の少女には感謝せねばな、姿かたちが違うとは言え、再び奏者と会いまみえる事が出来たのだからな。」

「なるほど・・・過去の聖杯ですか。そのようなものがあつたのですね。」

「うん。その子が体をくれて、私を生かしてくれたから。だから、私は感謝の意味も込めてその子の名前で生きる事にする。だから、二人とも私のことは、イリヤって呼んでね?」

「・・・ご主人様っ・・・なんてかわいらしい!!」「奏者!!余は・・・奏者がかわいいぞ!!」

なんか、二人に抱きつかれてしまった。私なにかしたのかな・・・? かわいい・・・って恥ずかしい。

「と、とりあえずさ!!二人の名前、教えてよ。」

二人をなんとか引き剥がし、二人の名前を聞く。

「とりあえず、私のことはキャスターとお呼び下さい。」

「余のことはセイバーと呼ぶのだぞ?」

「二人の本当の名前は?」

「「……………」」

「おしえて？」

「しかたありませんわね……ご主人様にそのような顔をされると、私良心が痛みますわ。私は、玉藻と申します。玉藻の前と呼ばれた、白面金毛九尾狐でございます。」

「そうだな、キャスターよ。余も奏者のそのような表情を見ると心が痛む。さて、余も名乗るとしよう。余の名はネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクス。ローマの第5代皇帝だ。」

私は二人が名前を覚えてくれたのがなんだか少し嬉しくて二人を指さしつつ答えた。

「じゃあ、タマモとネロって呼ぶね？」

でも、二人は、何故か顔を真っ赤にして後ろを向いてしまった。
「なんですか……？」

・
・
・
結局、二人きり以外ではキャスターとセイバーというクラス名で呼ぶことになってしまった。

二人ともかわいいのに……。

「おほん！！ご主人様、とりあえずここから場所を移動しませんか？」

「確かに。キャスターの言うとおりかも。」

「うむ、余も賛成だ。いつまでもこのような森では夜になってしま
うやもしれぬ。」

「そこで私、このあたりの地脈を調べたところ、ここは私の知って
いるところというのがわかりました。」

「ほう。そなたの知っているところとな？」

「へえ。どこなの？」

「日本です！！しかも、私の分身の近くです！」

「どういうこと？キャスター」

キャスターの分身の近くって・・・どういうことなのだろう。でも、
キャスターの知っている場所というのはありがたい。

「えーっとご主人様は私が殺生石になって封印されたのは知ってま
すよね？」

「うん」

「ほう。キャスター、そなた悪さでもしたのか？」

「セイバーさんにはかないませんよ」

「はいはい！それで??」

二人はなんだかイヤミを言い合うのが好きみたいだ。まったく。そういうのは勘弁してほしい。

「とりあえず、歩きながら話そう!! キャスター、セイバー」

「そうですね。ご主人様」

「うむ。余もそれに賛成だぞ。」

「で、キャスターどっちに行くの?」

「はい。こちらに。殺生石はとある和尚くそじじいによって碎かれて飛び散ったんです。その殺生石の一つの近くに今私たちは居るんですよ。」

「ほう・・・それで、キャスターよ。その殺生石がある地というところで、そなたがこの地に詳しいのはわかった。で、それでどうするのだ?」

「もしかして、そこへ行くの?」

「はい。そう考えております。そうすれば、私のパワーアップにもなりますし、たしかその近くには、昔から烏族うぐすくの村があったはずですよ。」

うぐすく・・・?

聞きなれない言葉だった。うぐすく・・・鵜族? 兎族? 羽族? 芋族・

・はないか。

「カラスゾクって書いて烏族^{ウソク}っていつんですよ。ご主人様。足元、気をつけて下さいね。」

考えてたらキャスターが教えてくれた。

「烏とな？あの黒い鳥が沢山住んでいる村か？」

「まあ、当たらずとも遠からず。簡単に言つと妖怪の村ですねー。烏の妖怪が集まって住んでいる村ってことです。」

なるほど。その村になにかあるのかもしれない。

「ほうキャスター、おぬし、狐の妖怪であろう？狐が烏の村に行つて大丈夫なのか？」

「なんですか？それ。」

「いや、なに。おぬしが烏と仲が悪いのでわなののか？とおもつてな。」

・・・それってあり得るかも。狐って烏とつて食べるっていうし。なんか、いま、キャスターが烏くわえてる絵が見えたような・・・？

「そう言われれば、狐って烏たべますねえ・・・でも、私は野干・・・って野干も鳥食べるんですた・・・でも、まあなんとかなるんじゃないか無いですかー」

最後、棒読みだった・・・なんか不安だ。なんかやな感じな気がする

る。

「じゃあ、近くまで行ったら、キヤスターは耳とっぽ隠したらいいんじゃないかな・・・？」

「奏者、名案だな。カラスは目が良いらしいからな。」

「でも、人間装って烏族の村に行ったらさらにあやしいんじゃないでしょうか？」

う、それは一利ある・・・。

「仕方ないな。まあ奏者になにかあっても余の剣で守るのみだ。」

「大丈夫ですよ。セイバーさんの出る幕はないですよ。私がキチンお話させて頂きますから」

なんかキヤス狐さんが怖いよう・・・。

「とりあえず、殺生石のどこいけば烏族の人に逢えるの？」

「まあ、先に烏族に行った方がいいと思いますね。たしか、管理もしてたはずですから。」

管理・・・って。

どういう状況なんだろう・・・？

「先ほどから気になっていたのだが、奏者、奏者の調子はどうなのだ？」

そういえば、私は私自身の体の事を気にしていなかった。

「ご主人様、もしキツイようでしたら言って下さいね。」

キャスターもセイバーもやさしいな。

「ありがとう、すこし自分を調べるよ。」

私は立ち止まると目を閉じると自身に集中した。

二人は周囲に気を配ってくれた。

無意識に足を肩幅に開くと頭の中で回路が浮かび上がる気がした。

頭の中に声が響いた。男の人が話している。

誰だ・・・？集中出来ない。邪魔をするな。

『集中出来ないのは自身の想像イメーが足りないからだろうか？』

イヤミな声が聞こえてきた気がした。

頭痛がする。それでも私は自身オレに集中しようとする。

『トリス・オン
同調、開始』

瞬間、クリアになった。

メイガス
魔術回路：108本：待機状態：全て可動可能

ウィザード
魔術回路：霊子化可能：端末破損：こちらの世界の端末入手必須

ハード
肉体機能：肉体縮小：それに伴い戦闘方法変更：ムーンセルからの

インストール完了まであと102秒

ムーンセル
魔力量：聖杯イリヤと聖杯からの魔力供給：100%：警告：魔力漏れ多

数：回路閉鎖を推奨

△インセル聖杯：魔力量89%：サーヴァント維持状態良好

イリヤ^{イリヤ}聖杯：魔力炉正常稼働：稼働率60%：魔力供給率：78%

：正常稼働中：肉体損傷0%

さて、見覚えのないものが沢山あるのは気のせいだろうか・・・？
一つ一つ考えていこう。

メイガス^{メイガス}魔術回路はたぶん、古いほうの魔術だろう。回路108本って多い？
ウイザード^{ウイザード}魔術回路は、新しいほうの魔術。端末破損って、もしかして。

私はポケットに手を入れると、ボロボロの携帯端末を取り出した。
うわー。気に入ってたのに。フォンちゃん・・・。

肉体は、イリヤにももらったモノだから、縮小するのはなんとなくわかる。ムーンセルから戦闘知識や経験インストルを学習出来るのは助かる。

魔力量って、聖杯達から自動供給なのか・・・。自分の魔力が無駄に放出されていることに気づくと回路を最低限のこして閉鎖する。

△インセル聖杯は魔力タンクってことなのか。だいぶあるなー。私の魔力量半端ないなあ。

イリヤ^{イリヤ}聖杯は魔力を生みだす魔力炉の役目か。稼働率を30%まで下げておこう。しばらく使わなそうだし。

さて、最後のわからないものを調べてみますか。意識をそれに向けると、青い板・・・？違う。剣の鞘だ。もしかして、ケガや老化を止めている・・・？

もしかして、あの有名な聖剣の鞘？

なんで？そんな物が？まあ、あるならいいや。

：名称変更：名称『鞘』に変更されました。

よし。これでいい。

「とりあえず終わったよ。二人ともありがとう。」

二人にお礼を言う。

「いえいえ。これくらい当たり前です。では、ご主人様、参りましようか？」

「そうだぞ。余は奏者の剣であり、盾。これくらいは当たり前だ。」

二人は頼もしく胸を張る。

なんか二人とも立派に揺れてる…ウラヤマシクナンテナイよ…。

私達は再び足を進める。

1時間位歩くと少し離れた所に気配を感じた。

【side out】

【side 刹那】

なんで…？

なんでなん？

なんでみんなうちにひどいことするん…？

うちが悪い子やから？

うちが・・・『しろい』から？

なんで・・・？

なんでみんないたいことするん？

なんでうちのいやなことするん？

なんで？

いたいよ・・・たすけて。

だれか・・・たすけて・・・。

うちははしった。

いたいのも、つらいのもいやだから。

だれも、もうたすけてくれない。

おかあさまは、うちをうんでしんだ。

おとうさまも、しんでしまった。

だれも、たすけてくれない。

うちにはげるしかなかった。

だれか。たすけて。

でも、『くろい』おじちゃんたちがうちをおいかけるん。

だから、うちはもつとはしらんといけん。

つかまったら、いたいことされる。

つかまったら、いやなことされる。

だからにげるん。

【side out】

【side イリヤ】

心配がした。キャスターとセイバーが配置について警戒している。

私自身も身構えていると、草むらから転がるように出てきたのは、真っ白の少女。

あわてて助け起こす。私は女子供は大事にするんだ。

「大丈夫か？」

その子供は私に目が合うと、私の髪をさして、言った。

「うちと、おなじ……。」

よく見ると、その子は傷だらけ。草とかで切った傷の他に、明らかに殴られた跡が見える。

「キャスター、セイバー。周囲の警戒してて」

二人にはまだ周囲を警戒してもらおう。

私はその子の背中に翼があるのに気づいた。

「どうしたの？なにがあったの？」

「ご主人さま、その子は烏族のハーフかと。でも白い烏族とは……。」

キャスターが白いと言った瞬間子供がビクリと震える。私にしがみつくようにして、がたがた震えるその子は何かに脅えているようだった。

「キャスター。わかる事は説明して。」

私は内心、怒りに震えていた。こんな子供を殴るやつは許せない。子供には罪がないはずだ。周囲の大人に罪があっても。

「はい。烏族は基本黒い色の方がおおいです。しかし、白……は禁忌とされて……たぶん、その子は……。」

「なるほど。余はなんとなくわかった。いつの時代も人は自分と違

うものを恐れ、排斥しようとする。そのかわいらしい子も同じなのだろう。」

「ご主人様。気配多数。たぶん烏族かと。」

「二人とも・・・わたしは・・・」

「奏者、言わずともわかる。余はその子を受け入れるぞ。」

セイバーが、私の言葉を読んで答えてくれる。

「ええ。すこしきついかもしれませんが、その子さえよければ。」

キャスターも賛成してくれた。

あとは本人次第。

「ねえ、あなた、名前は？」

私はなるべくやさしくその子に話しかける。

「・・・せつな・・・」

「せつなちゃんね。せつなちゃん。前居たところでいやな事あったんでしょう?。」

うんと頷く様子から、私には警戒してないみたい。私も白いからかな?

「だったら、お姉ちゃんが守ってあげようか?。」

「……ほんとう？……いたいことない？」

私は笑顔で、もちろんと答えた。

その瞬間、回りに黒い者が展開し、私たちを取り囲む。

数は、8名ほど。たぶんこの子を追いかけたやつら。

私は心の中で呟く

『トレース 同調、オン 開始』

第一章 く出会った少女く（後書き）

キヤス狐と赤王の掛け合いが楽しすぎて、気づいたら字数がとんでもないことに。

やっぱ。とか思いつつ、ノータイムで投稿。

今までの最高字数をかゝゝるく突破。

キヤス狐&赤王は最狂w

しかし、私のオリジナルは全然進んでません。
やべ。

とりあえず、こっちをもう少しすすめたら、投稿しようと思っ
てます。

第二章　男と少女（前書き）

本当は4日のうちに投稿するはずだったのですが……。

今回は駆け引きメインで。

あんまりおもしろくないかもしれませんが。

第二章　男と少女

【side 刹那】

うちがはしつてると、きがじゃまして、うちはこけた。

でも、だれかたすけてくれた。

うちはそのひとにありがとつていいたくて、うえをみた。

そのひとは、うちとおなじだった。

「うちと、おなじ・・・。」

おんなじ、しろいかみ。でも、そのひとのかみはさらさらで、よく
れてきたないうちのとはちがう。

おつきさまみたいにきれいなしろ。

「キャスター、セイバー。周囲の警戒してて」

しろいおねえさんはうちのつばさをみた。

でも、おそろしいっていわなかった。

「どうしたの？なにがあったの？」

うちは、なんもいえん。なんかいったら、おねえさんにきらわれそ
う。

みんな、うちがしゃべるとたたくから。

「ご主人さま、その子は烏族のハーフかと。でも白い烏族とは・・・」

あのしつぽのおねえさん、うちのことしってる・・・。こわい。またいたいことされる。

「キャスター。わかる事は説明して。」

しろいおねえさん。おこってる。うちがなんかわるいことしたんや。うちが、わるいんや。

「はい。烏族は基本黒い色の方がおおいです。しかし、白・・・は禁忌とされて・・・たぶん、その子は・・・。」

うちは、『きたない』んやて。うちは、『いちゃいけない』んやて。うちは『わるいこ』なんやて・・・。

「なるほど。余はなんとなくわかった。いつの時代も人は自分と違うものを恐れ、排斥しようとする。そのかわいらしい子も同じなのだろう。」

え？あのあかいおねえさん、うちをかわいっていったん？

「ご主人様。気配多数。たぶん烏族かと。」

むらのひとがちかくまできているのはうちにもわかった。でも、うちはしろいおねえさんにだっこされてる。

このおねえさん、あつたかくて、あんしんするねん。

「二人とも・・・わたしは・・・」

「奏者、言わずともわかる。余はその子を受け入れるぞ。」

「ええ。すこしきついかもしれませんが、その子さえよければ。」

「ねえ、あなた、名前は？」

しろいおねえさんが、きいてきた。うちはおねえさんのかおをみた。あかめがほうせきみたいにきれい。

「・・・せつな・・・」

のどが、ぱりぱりしてうまくこえでらん。でもがんばってこえだした。

「せつなちゃんね。せつなちゃん。前居たところでいやな事あったんでしょっ？」

むらのこときかれた。うそはついたらいかん。でも、しゃべると、むらのひとにおこられる。だから、うちはうつむいた。

「だったら、お姉ちゃんが守ってあげようか？」

しろいおねえさん、うちをまもってくれん・・・？
もう、いたいことないん？もう、けられたりせんのか？

「・・・ほんとう？・・・いたいことない？」

しろいおねえさん、わらって、うちをだきしめながら、もちろんっ

ていつてくれた。
おねえさんのうではあんしんする。

うちは、ねむたなつて、そのままねてしてもて……

【side out】

【side イリヤ】

黒装束の人型カラス。
私たちを取り囲んだ烏族はそんな感じだった。

「なにものか存ぜぬが、その腕の子を渡してもらおう。その子は一応村の子ゆえ。」

1人が一步前へでて話しかけてきた。私はせつなを腕に抱いたままそいつの方へ向く。

セイバーとキャスターも同様に警戒したままそいつ……とりあえず“A”で……に向く。

私が二人に視線を送る。『せつなについては私が話す』

「そうですか、それは失礼をしました。しかし、この子の体には無数の者に殴られ、蹴られたような跡があります。そんな仕打ちをする村に返せるわけがあるでしょうか？」

何人が、眉が動いた。これくらいで動くってことはまだまだ、練度がたりない。

「しかし、それは我らが村の中のこと、そなたらには関係のないことと思うが？」

「ですが、この子は半分とは言え人の子。私たち人が口を出す権利もあると思いますか？」

むちゃくちゃだけど、烏族は烏族の中の事で解決するといってる人たちにはこの手を使うしかない気がする。

「ふむ。そなたらが、本当に『人』ならばな。」

キャスターが視線を送ってくる。『じれったいんで、目的と一緒に私がまとめちゃいます』

キャスターに任せてみようか？
いや、とりあえず。私がやろう。

「この子は貴方達の村では禁忌の子。でしたら、私たちが外へと出して貴方達から遠ざけたほうがお互いの利害が一致するのでは？」

逆方向から攻めてみる。これなら、筋が通っているはずだ。

「む。」

“A”がピクリと動く。

ここでもう一手。

「私たちは、この先にあるという殺生石に用があつてやってきました。あと、そちらの村で情報収集をしまえばすぐにも出ていきます。どうですか？」

「……とりあえず、長に相談してから決めさせて頂いてよろしいか？」

“A”が構えをとくと他の7名も構えをとりて“A”のうしろに並び。

その様子をみて、キャスターとセイバーも構えをとく。

「では、参ろうか。」

“A”の一言で烏族は歩き出した。

意外としつかり訓練されてるんだなあ。とかおもいつつ、彼らについていくことにした。

私たちも歩き出す。私が一番前でキャスターとセイバーは後ろに控えるようについてきた。

せつなは相変わらずよく寝ている。

「かわいらしいですね。」

キャスターが横から私の腕の中で眠るせつなを見ていた。

「うん。かわいいよね。それなのに、この子、こんなになって……」

顔に無数に着いた傷を見ながら、泣きそうになってしまった。

「奏者、泣く事はない。もう起こってしまったことだ。取り返しは

つかぬ。だが、奏者はこの娘に『これから』を与えてやればいい。」

セイバーの言うとおりだ。

私が泣いても、この子の傷が治るわけでもない。私はとりあえず、この子が『これから』笑顔になれるようにしてあげなければいけない。

「セイバーさんもたまにはいい事をおっしゃるんですね。」

キャスター、そんな言い方はさすがにひどい気がする。

・
・
・

しばらく歩くと、なにか、区切りのようなものがあつた。

「結界ですね。この中に鳥族の村があるのでしょう。」

キャスターがベストタイミングで説明を入れてくれる。キャスターの説明は簡潔で分かりやすい。

簡素な家が立ち並ぶ。その奥へ奥へと進む。回りをみると、人はみな黒い。たまにちやいろや紺色などは見かけるが、せつなほど白い子は見かけなかった。

みな、遠巻きに私たちをみていた。
きつと珍しいのと、私の髪の色とせつなだろつ。

奥まった場所に少し大きな家が見えた。たぶんあれが目的地。

「長、マレビト稀人を連れてきました。」

「入れ。」

なかから聞こえる声は、重厚で深みのある声。
私たちだけが入る。

長は、中に座っていた長は、今まで見た鳥族の中で最も黒い。まさに、カラスの濡れ羽色といった感じだ。

闇の塊のような長が私の中にあるせつなを見、そのあと私を見る。

「マレビト稀人、とりあえず話をきこつ。座りたまえ。」

「でわ、僭越ながら、ご主人様が変わり私がお話しさせて頂きます。」

キャスターが買って出る。ここは彼女に任せよう。彼女の知っている場所ということだ。

「うむ。許そう。そなたの靈格なかなか気に入った。」

「はい。まずは単刀直入に。殺生石の開封とこの忌み子の処遇、情報提供をお願いしたく参りました。」

キャスターが頭を下げる。まずは下手に出る方針らしい。

「後の二つは許そう。しかし、殺生石の開封と？あれがどのようなものかわかっておるか？」

「はい。私も狐のはしくれ。あれがどのようなものか、誰よりもわかっていと思います。」

「主、名は？」

「キャスターと。そう呼ばれております。」

「そうか。さて、その白い稀人よ。お主は、腕に抱いておるものが何かわかっているのか？」

「もちろんです。ただの幼子。それ以外に何がございますか？」

「赤い稀人。お主はわかっているのか？」

「余は、奏者の決めたことに従う。なぜなら、奏者はひどい目にあった幼子を何も躊躇せず助けるようなやさしい奴だ。弱きを助けて何が悪い。むしろ、余としてはこの村を壊してしまいたい。この幼子にこのような傷をつけるような薄情な村だからな」

長は何も言えないようだった。

「うむ。わかった。許そう。笑顔にしてやってくれ。」

長はもしかしてせつなを何とかかしたいと思っていた？
できない理由でもあったのだろうか？

「僕は長だからの。しきたりを破る事は出来ぬ。」

私は軽く頭を下げた。

「ん……」

せつなが目を覚ましたらしい。

「せつな。目が覚めた？」

私はせつなの顔を覗き込んだ。

「おねえちゃん。ここは……？」

「あなたの村よ」

回りを見回すせつなに簡単に説明した。

私の服をつかむ手が強くなる。

「大丈夫。長が、私たちとせつなが一緒にいくことを許してくれたわ。」

「おじいちゃんが……？」

なるほど。読めた。長の息子の子なのだろう。

「セイバー。せつなと一緒にせつなの荷物をまとめて来て。」

「わかった奏者。」

「せつな、この赤いおねえちゃんと、一緒にせつなの準備してきてね？」

せつなはうなづくとセイバーが伸ばした手をとる。
二人仲良く長の家を出て行った。

「長。早速殺生石の在り処を教えてください。」

「うむ。それは関西呪術協会に頼むとしようかの。いまはそちらが管理しておる。」

「そうですか。それはどこに？」

「なに。1人飛ばせば、すぐに連れ帰ってくれるだろう。しばらく待たれい。」

長は部下を呼ぶと、部下の耳元でなにかを囁いた。
部下はすぐに退席してしまった。

「さて、白い稀人。お主の知りたい情報とはなんじゃ？」

「はい。このあたりで、一番大きな魔術管理をしているところはなんといいところですか？そしてその本山がある場所は？」

「それならば早い。関西ならば関西呪術協会といい、場所は京都にある。関東なら関東魔法協会といって、埼玉の麻帆良学園。」

ならば、これから来るという関西呪術協会の人に案内させよう。これから、お世話になるのかもしれないし。

「あと、もうひとつ、いま居る場所は？」

「人間たちの使う名前なら、岡山県真庭市の深山という山の中じゃ古いやつなら、美作国高田」

「ありがとうございます。助かりました。」

素直に頭を下げる。

「長。早風が戻ってまいりました。」

部下の声が響く。室内には居ないのにだ。長が頷くと、一人の人間が入ってくる。

「こんにちは。烏族長。」

「どうも。これはこれは、詠春どのがやって来てくれるとはこれは話が早そうだ。」

「いえ。私はこれから京へ戻る途中。ちょうど帰り道になりますので、ついでにと、来たわけでございます。」

「助かりますわい。詠春どの、この稀人の方が伝えにあつた者です。」

詠春と呼ばれた男がこちらを見る。どうも値踏みされているような視線を感じるのは気のせいだろうか？。

「こんにちは。私が関西呪術協会の近衛詠春という」

「はじめまして。私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンといえます。そしてこちらが私の家族。キャスター。あと2人いるのだけど、所要で席をはずしてるから。来たときにでも紹介します。」

「アインツベルン君。とお呼びして構わないかな？」

「いえ。イリヤで構いません。」

「じゃあ、イリヤ君。早速本台だけど、殺生石を開封したいとはどういうことだね？あれは近づくだけで死んでしまう猛毒と知っているのか？」

「ええ。詳しくはそのキャスターに聞いて。」

私は、キャスターに丸投げする。この詠春と名乗る男をよく観察したいからだ。

「では、ご説明させて頂きます。私たちは、とある事情からこちらに飛ばされてきました。これから先何があるかもわかりません。少しでも戦力は強化したいと思いました。」

「そうですね。そのような大変なことが御有りだったのですか。」

「はい。そして、私は自分の力を多少封じられています。なので、自分の封じられた力を解き放ちたいと考え、殺生石を開封したいと考えた所存です。」

「自分自身の・・・力？と申しましたか？」

「はい。そうでございます。」

男は油断ならない感じがしたが、さすがにキャスターのほぼ自分の名前バラす作戦には何も言えなさそうだ。

「申し遅れました。私、本当の名をタマモ、といいます。」

詠春は目に見えるほど焦っていた。

そして、私とキャスターを交互にみている。まあ、伝説の大妖怪が私みたいな小娘の家族というか、なんとなく私の方が偉そうなのがわかったらしい。

「もどつたぞ。奏者よ。」

セイバーが返ってきた。せつなが、私に抱きついてくる。

「おねえちゃん。せいばーおねえちゃんやさしかった。」

「そうか。ならよかった。」

私はせつなの頭をなでながら彼女をやさしく抱き寄せた。

「準備は完ぺきだぞ奏者。して、そやつは何者だ？」

セイバーの瞳が鋭くなって詠春を見つめる。

「うん。近衛さん。すこし話し合いしてるんだ」

「ふむ。近衛とやら。余はセイバーという。奏者のサーヴァントだ。」

「

「これはどうも丁寧だ。」

詠春はせつなを見つめる・

「この子はせつな。烏族から私の家族になったの。いじめたら許さないからね。」

「・・・なるほど。わかりました。許可しましょう。というか、許せざるを得ないでしょう。ただし、条件をのんで下さい。」

「何でしょうか？」

上手くいきそうだ。キャスターに任せて安心らしい。

「関西呪術協会です仕事を引き受けてくれませんか？もちろん給料は出します。」

「どうする？いく？」

私は二人に聞いてみた。

「いいんじゃないですか？別に拘束されたりするわけじゃないですし。まあ、ですが、詠春さん。私たちは所属はしませんからね。外部からの協力者ってことにして下さい。」

キャスターがそう区切った。

長く生きてるキャスターは詠春の意図が読めていたらしい。

「余も満足だぞ。」

「とりあえず、仕事の件は二人ともいいみたいなので受けます。お願いなんですが、しばらく呪術協会でお世話になっていいですか？ 京都はよく知らないのです。」

私がそう付け足す。

「もちろん歓迎いたしましょう。」

詠春はそう言って笑顔を見せた。

第二章〈男と少女〉（後書き）

相変わらず、向こうに比べて文字数が多い。

がんばって書いていきますので、駄文ですがこれからも宜しく願
いします

第三章　闇色の少女（前書き）

とりあえず、ほのぼの目指して書きました。

すこし、微工口かも・・・？

第三章 闇色の少女

【side イリヤ】

しばらく私たちは、関西呪術協会に世話になった。
詠春の勧めで刹那は神鳴流という剣術を習うことに決まった。

関西呪術協会もなかなか大変らしく私たちがこの一カ月でこなした
依頼は20件。

こき使いすぎだろ。とツツコミを入れなくなる。

まあ刹那を優遇してくれた借りがあるからこれくらいなら我慢する。

セイバーは、刹那と一緒に神鳴流に顔を出したり、こちらの書物や、
歴史に興味を持ったよう最近で詠春の蔵書庫へ行くことが多い。
私とキャスターは魔術や呪術を研究している。

「ただいまかえりました。」

この声は刹那だ。
帰ってきたらしい。

「せつちゃんおかえりー。」

真っ先に飛び出すように刹那のもとへ向かったのはこのかという、
詠春の娘だった。

このかはその身に帯びた魔力が強すぎるため、この関西呪術協会の総本山から出ることなく暮らしている。

私とキャスターは暇を見計らってはこのかに勉強を教えていた。

勉強というのはこの世界のものもあれば、魔術や呪術的なものまで。

「おかえりなさい。刹那。」

「おかえりなさい。刹那ちゃん」

キャスターと私も家族をねぎらう。

「ただいまかえりました。キャスターさんイリヤお姉さん。」

「セイバーは？」

「セイバーさんは、長の蔵書庫に・・・」

いつもの事なので私は特に気にしない。

「このか、まだ勉強終わってないですよ。」

キャスターが刹那の後ろに隠れるようにしていたこのかを捕まえる。

「やー。せつちゃんとあそぶー。」

キャスターはやれやれ、といった感じで私をみる。

「まあ、今日の分はこなしだし、勘弁してあげたら？キャスター」

すこし、不満顔をするが、そこはキャスターにお願いする。

「ね？」

「しかたないですねー。その代わりに、刹那がシャワー浴びてきたら遊んでいていいですよ。」

このかと刹那の嬉しそうな顔を見て、私もうれしくなる。

「イリヤお姉さん。ありがとうー!!」

本音を言えば、私は久しぶりにキヤスターとのんびりできるからいいのだ。

「二人とも、遅くならないように帰るんだよ？」

「はい」

二人は手をつなぐとタタターと駆け出して行った。

「元気ですねー。」

キヤスター。その発言年寄りっぽい。

「きゃあーすーたー」

私はキヤスターのしっぽに顔を埋める。

この間、初めて触ってからこのしっぽの魔力が私を捉えて離さないのだ。

「ひゃあー!」
「じゅじんさまっ。」

「しっぽー！。」

頬ずりして、なでまわす。

「あつ、んっ、い、いきなりい・・・」

キャスターはしっぽがかなり弱いらしく、私がさわるとこんな感じだ。

それでもやめない。まあ、キャスターが嫌がってないから続けるんだけどね！。

「ふぁ・・・んんっ・・・あぁつ。。。」

手が上下するたびにキャスターの音が漏れる。
変なことしてないよ？

ただしっぽ撫でてるだけですから。

重ねて言うけど、しっぽをなでているだけですからッ！！

（10分後）

キャスターはなんか、顔真っ赤にしてくたくたになってた。
私はしっぽを十分堪能出来て幸せだった。

【side out】

【セイバー】

余が、近衛の家にきて一番の楽しみはこの国を知る事だ。

この国の民がどのようなにして生き、どのようなものを作りだしたのかが気になっている。

そして、詠春の蔵書のなかには余の知らぬ魔法というものが書かれた本もあった。

それは余の好奇心をくすぐる。

「うむむ・・・このようなものが・・・」

だいたい二日で1冊ほどのペースで読んでいる。

ちなみに午後限定だ。

涼しい午前は刹那とともに神鳴流の剣を学びに行っておる。

刹那は才を持っており、とても素晴らしい剣士になる事がわかる。

余はそのような才を持つ者を見ているのがたのしい。

神鳴流はこの日本で生まれたものだ。魔をはらう事に特化したそれは、よく考えられている上に芸術性も高い。

余はこの国が好きになって。キャスターの祖国と聞いて最初は嫌悪しかなかったが、この国をすれば知るほど好きになった。

「そろそろ、もどるとするか・・・」

ある程度読み進めると余は本に棊を挟みいつも奏者のいる縁側へと向かう。

詠春の家では室内で靴を脱ぐという習慣があった。最初は驚いたが余も今ではなれてしまった。

それに、木の板の上や、畳と呼ばれるものの上を素足で歩くのは意外と気持ちが良い。

この広い家は豪華ではないが、質素ではなく、なんというか、趣がよい。

最近、日本ならではの美意識『侘寂』わびさびというものを考えるようになった。

これがなかなか面白い。

「奏者。戻ったぞ。」

奏者のもとにたどりつくと、奏者に声をかける。

「おかえりなさい。今日も勉強になった？」

うむ。相変わらず奏者はかわゆい。

雪のように白い髪にルビーのように輝く紅い瞳。年齢はムーンセルの中のときより2歳ほど下がった、15〜6歳に見える。

「うむ。余は楽しかった。」

「そっかー。」

「おかえりなさい。セイバーさん。」

その奥にはキャスターが居た。

最近、奏者とキャスターは詠春の娘のために教鞭をとっていると聞

く。

余としては、奏者と居られる時間が短いのはすこし不満なのだが、刹那の護衛と神鳴流を学べるチャンスの午前も捨てられない。

そして、こちらの事を覚えるたびに奏者が褒めてくれるので、読書の時間は削るわけにはいかない。

なんとも歯がゆいが、このようにのんびりできる時間がある分、余もまだ我慢できる。

余としては、奏者と夜を共にしたいのだが、奏者がまだ許してくれないのが少し寂しい。

「キャスター、どうしたのだ？顔が赤いぞ？」

「な、なんでもございません！！」

なにかやけに様子がおかしいが本人が何でもないと言っているのならそうなのだろう。

「奏者、余は疲れたぞー。」

「はいはい。おつかれさま。」

奏者に撫でなでをねだる。縁側で隣に座って、頭をなでてもらう。これが一番幸せだ。

「キャスターお茶を出せ！！」

「なんで私があなただのお茶を出さなければいけないんですか！！」

「奏者は余に撫でなで忙しい！余は撫でなでされるので忙しい。」

だからキャスターだ!!」

キャスターはぶつぶつ言いながらも用意してくれる。

一か月、一緒に居てみてキャスターともそれなりに打ち解けた。奏者の次くらいには気に入っている。

しかし、奏者を旦那とするという発言には許可出来かねるがな。

「はい。セイバーさん。」

「うむ。」

キャスターはキッチンとお茶菓子を出してくれる。うむ。わかっていてくれて余はうれしい。

「ところで奏者。今宵の仕事はどうするのだ？」

奏者に今夜の仕事の打ち合わせを提案する。

たしか今宵は召喚された鬼の討伐と聞いた。

「今夜は先日捕まった召喚士の召喚した鬼を10体討伐したら終わるよ。魔力が残ってるらしくてまだ暴れてるらしいからね。」

「討伐にはセイバーさんとご主人さままで向かって下さい。私は術式を解除に個別で向かいます。」

キャスターが提案する。

「キャスター、一人で大丈夫？」

「はい。この間、豊後の国に行き、もうひとつ、開封出来ましたの

で、その力を試したいのもあるんです。」

豊後の国か。確か九州というところで今は温泉が良く出る観光名所だったな。

「へえ。だつたら任せるね。」

「奏者は体の方は大丈夫か？」

「うん。アーチャーの術も大分つかえるようになったし、彼の剣の腕も多少コピー出来るようになってきたから。大丈夫だと思う。」

そういえば奏者はあのアーチャーの使う術を使うようになった。

理由は『せっかくムーンセルっていう知識の宝庫があるんだから。それを生かすとしたらアーチャーの術でしょ。それにそれしか魔術マジックはつかえないみたいだから。』とのことだ。

「そうか、ならあまり多くは言わぬが。」

「心配してくれてありがとうねセイバー。」

奏者が笑顔で返してくれた。うむ。相変わらずかわいくてたまらん。

「それでは、夜に備えて寝ますか？」

時刻は直に3時を回る。確かに今のうちにすこし寝ておかねば夜がつらくなりそうだ。

キャスターの提案に余も奏者も賛成だ

「うむ。では一緒に寝るぞ。奏者」

「フシャー！！セイバーさん！！抜け駆けは許しません！！っ
つかご主人さまは私と寝るんです！！」

キャスターが牙をむく。余は余の剣に手をかける。

「それは余とて譲れん。」

「二人ともやめて！！みんな一緒にねるから！！」

奏者はわかっておらぬようだった。

結局三人なかよく『なにもなく』ただ寝ただけだった。

かなり残念だ。

【side out】

【side キャスター】

夜、私はご主人さまと別行動で、鬼を縛っている術式を解除しに行きます。

ご主人さまとセイバーさんは囿となって、鬼をひきつけ、私が陰で術式を解除する。

それが今回の作戦。

刹那とこのかが眠ったのを見計らい、私たちは本山を後にします。

行きがけ詠春に頭を下げられました。

彼は子供を守るために残る事になっています。

私は変化を使い、普通のどこにでもいる野良猫に化けます。

あまり好きではない術なのですが、隠密行動には猫が一番楽なので
す。

今夜は新月で月が無いのでクロネコにしましょう。

そうすれば見にくいはずです。

私は何重にも認識障害と妖力封じをかけると闇にまぎれて走ります。

それにしても、昼間のアレ・・・すこし勘弁してほしいです。

嫌ではないのですが・・・なんとというか、アレをされると、夜が
無性に寂しくなってしまうんです。

もう、いつそのこと呪術でご主人さまを・・・とか考えてしまうこ
とが多くなりました。

そりゃあ、今の生活も楽しいし幸せですけど・・・やはり、『妻』
としてはすこーし。ほんのすこーし、物足りなくなってしまうん
です。

昼間、三人で寝たのは結構幸せでしたけどね・・・。

さて、結構走ったので、場所の確認の為に高い所へ。

あともうすこし走れば、術式があると言われている場所に着く予定
です。

視力を強化して、山の方をみると、赤い光と白の光が見えました。
たぶんご主人さまとセイバーさんが鬼に接触したのでしょうか。

さて、私もお仕事をしに行かねばいけません。

旦那さまだけ働かせるのわけにはいきませんからね。

私は木を下りるとただ走りました。木と木の間を風のように縫って
走るわけです。

たぶん普通の人には視認できない速度のはずです。

走るといふより奔るといふ表現のほうが適切かもしれませんね。

星がきれいなのがとても気持ちいいです。

新月の日は力が落ちるんですが、ご主人さまとの幸せパワーで、今
日はいい働きをしてみせます！！

【side out】

第三章 闇色の少女 (後書き)

書くスピードが過去最高速度です。

まあ、キャス狐さんと赤王さんが勝手に先に突っ走ってくれるんで、それ書いてるだけなんですけど。

キャス狐さんのしっぱの設定はありがちですが、はずしてはいけない気がして付けました。

刹那たちはあんまり出してません。

そろそろ主人公の能力とか使ってバトルしたいなーとか思いつつ、まだまだ能力があんまりまとまってないです。
たぶん今からまとめて資料にする予定。

まあ、予定は未定であって決定ではないから、たぶんしないです。 W

間違えて完結設定にしてみました。

教えて下さった方々、ありがとうございます。

本当は書きたい事がたくさんあるのですが、眠たいので今回はこの辺で。

また気付いたことあれば気軽に書き込みしてください。

私は単純なので、ちょっとしたコメでも喜んでしまいます。 W W W

ではでは、本日はこの辺で・・・

第四章↳決意の少女↳（前書き）

時間をぶっ飛ばして書きました。前章よりだいぶ時間がぶっ飛んできます。

ちなみに主人公は年齢変わりません。

というか、ぶっちゃけ、原作介入さっさとしたかったというのが本音です。

10年位たってます。

ネギ坊主が修学旅行に来る前あたりをイメージしておいてください。

第四章　決意の少女

【side イリヤ】

のんびりとした昼下がりに、私とキャスターとセイバーは縁側で寝ころんでいた。

季節は夏。

私たちが詠春の家に来てから10年位たっていた。

刹那は神鳴流でメキメキと力をつけ、最近では麻帆良学園というところでこのかの護衛をしているらしい。

そういえば、あの二人仲直りしたのかな？

私はここ数年、神鳴流の修業をするようになっていた。もともとアーチャーの二刀流をまねていた私は神鳴流の一刀流もなかなか新鮮で楽しく修行が出来た。

師範代の目は怖かったけど。

仕事で貯めたお金も結構な額になっており、そろそろどこかに家を借りようかとも思っていた。

しかし、この詠春の家はなにかと便利だった。蔵書は豊富で、魔術や呪術の研究はし放題。

食事はおいしいし、セイバーもキャスターも気に入っている。

一応、詠春とは平等な立場らしい、さすがにここまで甘えるのはいかななものかと思っているけど、今の詠春は、

「このかの護衛や、教育係、その上仕事を手伝ってもらっていましたし、お互い持ちつ持たれつですよ。」

とそんな感じなのである。
うむ。平和すぎて暇だ。

「キヤスター、そういえば石はあといくつ開封するの？」

キヤスターの殺生石の開封があといくつのこっているのか・・・それが心配だ。

「んーとあと一つくらいじゃないですか？」

関西はもう探し終わっていた。あとは関東や北海道の方面だけだ。殺生石は、いちばん最初の岡山県に一つ。大分県に一つ。あと広島県にも一つあった。

細かく飛び散ったのはさすがに集められないが、大きなものだけでも回収してしまうのが目下の目標だ。

「奏者ー。ここがわからぬー」

セイバーに本のことを聞かれる。

「ああ、それはね・・・」

答えながらも私は別の事を考える。
このままでいいのかな・・・。

「どつも、御三方おそろいのよつで。」

「なんだ、詠春か。」

「詠春さんどうかなされたんですか？」

「なにかあったの？詠春」

三種三様のんびりとした返事。

「いえ。お願いなんですけど、」

「どうしたんですか？」

「いえ、今度東からの特使がやってくるらしいのですが、その時にもしかしたら下が騒ぎ出すかも知れません。」

キャスターじゃないけど、ピンときた。

「抑止力ってやつですか？」

「はい。イリヤ君は話が早くて助かります。」

第三者が抑止力として出たほうが、両方の調停にはちょうどいいのだ。

「そういえば、東の本山は麻帆良だったな？刹那とこのかはやってくるのであろう？」

「たぶん。来ると思います。このかが狙われると思います。」

一応キャスターが魔力封じのネックレスをつくって渡したけど、顔と名前ではれたりもする。

認識障害をつかって、何となく歩いてる時は気がつかなくとも、探しているときは魔力の術式を感知されてしまえば見つかる。つまり万全ではないのだ。

「わかりました。向こうから特使にはどなたが来られるんですか？」

「ネギ・スプリングフィールドという10歳の少年先生です。」

「ねえ、10歳の先生で、特使ってふざけてない？」

なんか、それ、ふざけてる気がする。

ふつつは、きちんとした大人が特使としてやってくるのは当たり前だ。

「まあ、義父さんですから・・・」

東の長は詠春の父親というのは有名な話だ。

詠春が申し訳なさそうだ。

「ふーん。なら、今後はここを離れたほうがいいかもね。」

そう東の長を快く思わない第三勢力と関西呪術協会が仲良くしている。というのはあまり詠春にはプラスにはならない。

「ご主人さま。私もそう思います。関東の長といえば私の殺生石の件。口では『あい、わかった。任せてくれ』とかいいつつ全く成果報告してこないような奴ですから。」

「余も、そのように長が下々を考えぬような輩は好まぬ。」

「すみません。イリヤ君……。」

「詠春は仕方ないよ。まあ、かわりっちゃんんだけど、最後の頼みがあるんだ。」

「何でしょう？私で出来る事なら。出来る限りはさせて頂きます。」

「調べてほしい事があるんだ。」

私の表情で、詠春は私のこの後の行動が読めたらしい。

「イリヤ君……。もしかして……。」

「こつちで言うなら、『虎穴に入らずんば虎兇を得ず』って感じかな。私は私の目で見てみるよ。」

私は笑いながら言う。

「奏者の策、余も乗るぞ。」

「それに致しましても、簡単には虎穴には入れませんわね。こちらに来るといふ特使にあってみてからですわね……。」

セイバーもキャスターも乗り気のようにだ。

「詠春。ごめんね。まあ、詠春とのことは否定しとくから。ただ、刹那はどうする？」

そう。問題は刹那だ。

あの子は便宜上、西から東へ行ったものだからだ。

「それは、私が父親として、貴女方に護衛を頼んだだけのことですよ」

「そっか。そうだったね。詠春。まあこのかの事は私たちが護るよ。どんな道を選ぼうともね。」

「ありがとうございます。なにかありましたら、ご連絡ください。」

私と詠春はニヤリと笑う。

「まあ、なにはともあれ、特使が来るまではここで、のんびりと待たせてもらうね。神鳴流も修業させてもらうつもりだし。」

「はい。」ゆるりと。」

私はそういうと、自分の部屋へと向かう。

「詠春よ。今度、余と剣を合わせて見ぬか？」

「はい。今度。必ず。」

詠春に声を掛け、セイバーも私の後についてくる。

「詠春さん。呪術のことで何かあったりしたら私におっしゃってください。あ、あと東のジジイを呪殺したくなったときはいつでも。その変わり、アリバイお願いしますね。」

「ははは。それは心強いです。でも、なるべくそついう事にならないようにしておきます。」

キャスターも詠春に声をかけると私の後をついてくる。

うん。これでいい。私と詠春は友達だっただけ。

これでいいんだ。

〜その夜〜

「じゅじんさま……。」

「奏者……。」

布団に入っていると、なぜか二人がやってきて、危うく……。たぶん、もうすぐここを離れる寂しさからだろうと、思う。つてかそう思いたい！！

「……………っ……！」

形容しがたい咆哮が関西呪術協会の本山に響き渡ったのはココだけの話だ。

ちなみに、ぎりぎりせーふだったと付け加えておく。

勘違いを防ぐためにも！！

いい！？　せーふ　っだっ　たんだからな！！

第四章↳決意の少女↳（後書き）

どうでしたでしょうか？

急いで書き上げたので誤字脱字あるかと思えます。

最後のやつはお遊びが足りない気がしたので、すこし遊ばして頂きました。

今更ながら、この小説は、私の趣味100%で錬成されています。つまり、私の固有結界なのです！！ コラ
というか、妄想結界？w

すみません。ちょっとテンションおかしいです。

こんな妄想結界にこれからもおつき合い頂けるとありがたいです。

でわでわ。

更新は相変わらず不定期です。

最悪、お盆明けになるかもです。

8/10 修正しまつた。

なんか後から読んでて変な感じがしたので
でわ

第五章　宝石と少女（前書き）

どうもです。

今回は文字数結構多くなっちゃいました。

えっと、これから里帰りなので、『たぶん』次の投稿は16日以降になると思います。

まあ移動中も、携帯でポチポチ書くので、ある程度たまれば投稿するかも知れません。

第五章↳宝石と少女↳

【side イリヤ】

この一週間、私たちは思い思いの時間を過ごした。

私は神鳴流の修行と、情報の分析、作戦。

キャスターは、魔法の研究、呪術との違い、そして、式をつかった殺生石の探索。

セイバーは剣の修行、スキルアップ。そして、刹那との連絡をこまめにとっていた。

そんなこんなで、数日。

私はなんとか奥義が形になった。という感じだ。

キャスターは目立った成果はなかったみたいだけど、もうすこしだ。とっていた。

やはり、魔法を使う人間が居ないのが痛いらしい。研究対象がないのだから、研究もあんまり進まないよね・・・。

セイバーも私と剣を打ち合っていたけど、相変わらず強い。

刹那からの情報だと、修学旅行は4泊5日。

子供が総本山に来るのはたぶん3日目の自由行動日だろうとのこと。カグラザカアスナという魔法無効化能力者が一緒だということ。

このかが無意識だが多少魔法関係にかかわってしまっていること。クラスには何人もデキる人がいるということ。

その中で一番興味があったのが、吸血鬼が学園に居るということだ。

なんでも、有名な吸血鬼らしく、魔力も桁はずれ。しかし、学園に封じられているらしく、修学旅行には来れないだろうということ。

ちなみに詠春や、刹那から得た情報から分析して、子供に関する情報。

魔力量はA A

身体能力A +

頭脳A A +

しかし、精神力はC -

という感じだ。

正直、私たちから見た子供の評価は、『ただのアタマノいい魔力タシク』という評価だ。

ある程度はつかえるかもしれないが、肝心な時にはつかえない弱虫らしい。

10歳だからなあ。

そういえば、刹那の情報を聞いていて思った。

東の長は糞狸だと。3 - Aはただの犠牲者で、子供を護るための肉壁だと。

このかを護る為には最悪、東の長と子供から引き離す方が良い事。

それが私たち三人の共通意見だった。

「思ったより・・・最悪ですね。」

「そうだな。戦力はいいのだが、状況だな・・・。」

修学旅行前日。三人で、机を挟んで作戦会議。手元の資料から推測できる状況の率直な感想。

そう。東の『戦力は』なんとかかなりそうなのだ。ただ、このかの状況と、麻帆良という拠点の立地というか、拠点の状況だ。こちらの、世界樹という樹はものすごい魔力をもち、その力と電力によつて結界を張っているらしい。そしてその結界はおそらく認識阻害の効果を持っているという。ある程度の資質、魔力、精神力のないものには魔法が認識できないというものだろう。

「とりあえず、子供がやってくるのは四日後か。たぶん明日の昼には刹那たちは京都に居るだろうね。」

「できれば、監視を1人付けたいですね。刹那からの情報だけでは足りない部分がでてくると思われますので。」

「そうだな。監視であれば余が参ろうか？」

「いえ、私が参ります。変化を使えば、ばれることもないでしょう。」

「確かに。キャスターが適任だと思う。じゃあその様子をどうやって伝えるかが問題だね」

多分式神になるだろう。

「でしたら、分身はどうでしょうか？」

キャスターの発言に一瞬ついていけなかった。忍術か？

「いえ、失礼しました。分身というのは正確ではありませんね・・・正確に言うなら分御霊わけみたまと言う感じです。」

キャスターに詳しい話しを聞く。

「これは高位のものしかできないんですが、自分の魂を分けて、何らかの呪物を寄り代として憑依させたりすることです。力を大量に分け与えれば呪物がなくともその体のある程度なら現界させることも可能ですが…私の尻尾はまだ七尾。まだ完全ではない私にはそれは難しいです。なので、何らかの呪物に私の分御霊として私の尾を一尾ずつ憑依させようと思います。」

つまりキャスターの七尾のうち、私とセイバーに一尾ずつ与え、連絡係として使うということか…。

「それはいい考えだけど、その呪物ってなんなの？」

寄り代のための呪物がなければ意味がない。

「こちらで作られたものである程度呪術的処理をされていれば大丈夫です。ですが、私としては、やっぱりいゝかわいいものとか、美しい物がいいっていうか、あーほら、私みたいにいゝ。きゃー！こっちやった！」

キャスター。真面目に頼む。

「では、以前おぬしがこのかにつくっておったネックレスなら良いのではないか？おぬしが作るのじゃからおぬし自身との相性もよいであろう？」

セイバー、華麗にスルーしてるよ。
しかし、セイバーの言うとおりだ。

確かにキャスターが作ればキャスター自身との相性は最高で、呪術処理も自由自在だ。

「そうですね！でしたらご主人さまのは指輪にしましょう。私とお揃いの、夫婦の誓いの証ですねっ！」

「なにっ！キャスター、それは聞き捨てならぬ！奏者とは余が契りを交わすのだ！勝手に話しを進めるでない！」

ゲンキダナー。二人とも。

「じゃあ、ここは平等を期して、三人ともブレスレットって感じがいいんじゃない？指輪はなんかいかにもーだし。」

うん。これで納得してくれることを祈る。

「はあ、わかりましたよう・・・ブレスレットにしときます。ではどんなデザインにしましょうか？」

「それは後にしよう。とりあえず、こっちの作戦詰めちゃおうか？」

「うむ。こちらに到着した時点で刹那からは連絡が来るようになってる。近場にキャスターが居れば、いつでも大丈夫であろう。」

「でわ、私はばれないように、この修学旅行の予定にそって追跡ですな。」

机の上に置いてある修学旅行予定を見ながら言う。

「たぶん、詠春が言ったように、騒ぎ出す奴が居ると思うけど、基

本無視ね。刹那もいるし、このかは学生だからたぶん子供先生が護るだろうし、もし本格的にさらわれて危ないなら、サクッと殺つちやっつていいからね。キャスター」

「そうですね。式神の情報によりますと、天々崎千草という呪術師が怪しいと思われます。最近神鳴流剣士を雇ったらしいですね。」

「もしや、丸メガネで釣り目の女か？」

「たぶんその女性だと・・・」

「しってるの？セイバー」

「おそろくなのだが、この間、神鳴流に来ておつた。しかし、鶴子に門前払いされていたぞ。」

「え？ですが、神鳴流を雇つたと聞いてますが・・・？」

セイバーの証言とキャスターの情報があわない。
どういうことだろう・・・。

「そういえば、鶴子がなんか言っておつたな。『昔とは違う。うちらは仕事の為ならなんでもするような人間じゃないんで！』」

「ふーん。つてことは神鳴流を出た人間を雇つたつてとこかな？」

その確率が高い。

んー。キャスター一人だと、大丈夫かなあ・・・

「大丈夫？剣士つくときつくない？」

「たぶん大丈夫ですよ。ご主人さま。ご主人さまに預けている尻尾を引いても、五尾あるんです。そこらへんの人間に負けません。それ以上が出てこない限り大丈夫です。」

「そう、無理しないでね。ヤバそうならいつでも呼ぶんだよ？」

「ご主人さま……。心配してくれるなんて……。タマモ……。幸せですっ！！！」

キャスト元気だなあ。そんなに刹那に逢えるのが楽しみなのかな？

「うむ。余からも忠告しておく。諜報とは一番危険故、何かあればするに言うのだぞ？刹那に何かあったら、余は……」

その気持ちは私も同じ。

刹那に何かあったら私も嫌だ。

きつとキャストも同じだ。

だから私はキャストに信頼して預ける。

「そういえば、ここ最近メガネさんが古い書物を探し回っていたらしいです。なんでも古い鬼神かみについてかかれた物だそうです。」

この辺りで古い鬼神かみならばキャストかスクナだろう。

キャストの殺生石は関西にはもうないから開封しても意味が無い。それにマスターが私だから操っても絶対命令権がある。ということはスクナの開封だろう。

「キャスト、スクナってしってる？」

スクナは神様とも言われている。
知り合いだったらなんとかなるかも・・・とか淡い期待をしてみた
り。

「んー。まあ、一応知ってはいますけど・・・あの人結構、
大雑把といえますか・・・よくいえば大らかといえますか・・・私
あのかたはちよっと・・・。」

何となく、わかった。

知り合いではあるが、キャスターはスクナに対して苦手意識を持っ
ているらしい。

「そうなんだ。」

つてか、最悪そいつが出てきたら私たちが倒さないといけないかも
しれない。

「あーでも気にしないでください。正直、あの人は結構ウザかった
ので。別に倒しちゃって構いません。それに、私たちは普通の死ぬ
とは違うものなので・・・。」

普通の死ぬとは違う。といった。死ぬ概念が違うのか？

「ふむ。キャス狐よ。それはどういことなのだ？」

「えーつとですね、スクナもちよつとした神なので、死んでも、元
の場所に戻るといふか・・・。まあ、死んでも無くなることはない
ので大丈夫ですよ。というか、ぶっちゃけ殺して下さるとしずかに
なっつてうれしいのですが。」

静かって・・・封印されてるよね・・・？

「いや、昔から、そのシッコイといいますが・・・私は、その、
」

「ほう。もしかやキャス狐よ。お主スクナに言い寄られているので
はないのか？」

何を言ってるの！！セイバーさん。

ほどほどにしないでよ！！

「・・・・・・・・」

その、顔を真っ赤にして恥ずかしがる様子なにそれ！キャス狐さん。
図星ですか？

「キャスター。セイバーの言った事って・・・」

「ご主人さま！誓って言います。ちゃんと断っていますからね！断
ってますよ！！」

あー。言い寄られてることは否定しないのね・・・。

「ってというか、話がどんどんずれてるね。まとめてしまおうか。」

気がつくともう昼を過ぎており、キャスターの呪物作成の事を考
えると早めに終わらせた方がよさそうだ。

「じゃあ、おさらいね。まず、刹那から到着の連絡をもらった時点

で、駅でスタンバイのキャスターが追跡開始。そしてよほどの事がない限り手を出さない。少々のケガは我慢してね。」

「はい。その際、天ヶ崎千草を発見したら、式に追跡させます。」

「深追いするなよ?。」

「わかってます。」

「はいはい。んでもって、キャスターは子供やその他の情報を逐一連絡。私とセイバーで記録と分析してくから。」

「了解です。えっと、そのまま三日間私ですか?。」

「いや、それはさすがにシンドイと思うから、旅館についた時点で私が変わるよ。予約は取ってあるから。3人で。だから大丈夫。」

「うむ。旅館に泊まるというのは初めてだが楽しみだ。」

セイバーそれは今関係ないし……。

「で、次の日はセイバーとキャスターで。とりあえず、このか、刹那と子供に関してだけの情報をあつめて。」

「うむ。了解したぞ。奏者よ。」

「お任せ下さい。ご主人様」

「夜はまた私ね。その間の記録は各自でお願いします。」

「そんな感じでローテーションしてつて、3日目は・・・二人に交代した時点で、私は総本山に行くよ。子供に直接会って話をしてみたいし。このかや刹那とも話したいしね」

「四日目も同じような感じでよいのか？」

「うん。同じ感じで。何かあった時は、こつ、寝不足になる人が出てくるけど・・・修学旅行終わったら、すこし休みにするからさ。お互い頑張ろつ？」

「はい！この私、粉骨砕身頑張らせて頂きます！」

「奏者よ、余は必ず奏者の役に立って見せようぞ。」

「ありがとう。」

私たちの作戦会議はこうして終わった。私は詠春に会わないまま、その日は布団にもぐった。

【side out】

【side キャス狐】

話し合いが終わった後、個人の時間になりました。

セイバーさんとご主人さまは寝るだけ寝るとの事です。

私はもともと眠りというものはあんまり必要ないんです。なんせ力ミサマですから。

さて。私はこれからご主人さまのご要望のブレスレットを作りますか……。

やっぱり、喜んでほしいですから、いいものを作りたいと思います。

どんなものにしましょうか……。

金属のものがカッコいいとは思いますが……。それだとなかなか呪物としての力が出にくいような気がするんですよねー。

ということは石を入れましょう。宝石は呪力とか定着しやすいんですよ。

良く言うじゃないですか。『指輪とかネックレスの中古は買うな』って……。

あれは以前の持ち主の運とか怨念とかついてる確立が高いからなんですよー。

ということ、宝石を入れる為に指輪にしましょう。

やっぱり、指輪とかがいいですよねー。

うん。指輪にしましょう。そしてついでに私と刹那の分も作っちゃいましょう。

家族ってことで……！

ご主人さまのぶんは小指用で、セイバーさんのは中指用。

トップの石の色を変えて、その石の裏側に梵字で刻みましょうか……

。。。
茶枳尼天タキニテンのでいいですかね。同じ九尾の狐ってことで。

石の色はどうでしょうか。

セイバーさんはバラの花が好きなので、薔薇輝石・・・つまりロードナイトにしましょうかね。

剣士というか、騎士になってますけど。

私は何色が良いですかね・・・やっぱり着物に合わせて紺にしましょう。

藍銅鉱アズライトとかいいですよね！！

刹那のは何にしましょうか・・・。

あの子はご主人さまと同じ白が似合うのですが、あの子自身は白が嫌みたいですから・・・。

かといって、黒にすれば・・・そのなんかいかにもーな感じがしますし。

悩みます。

巫ーン！！来ちゃいました。いいの思いつきましたよ！！意味合い的にいいものです！！

尖晶石スピネルです！！赤い色の石なのですが、向上心アップに良いらしく、精神的成長を促すと言われているそうですよ。

私ったらてんさーい！！

最後に、ご主人さまはやっぱり白い石が良いですよね。

今悩んでいるのは、月長石ムンストーン、乳石英ミルクオーツマザーオブパール、真珠の母ホワイトオニキス、白瑪瑙ホワイトオニキスって感じなんですけど・・・。

さて・・・。どれにしましょうか。

素敵な指輪を作って、ご主人さまを喜ばします！！
明日のご主人さまとセイバーさんの表情が楽しみです。

【side out】

第五章↳宝石と少女↳（後書き）

ネギの戦闘能力は私的解釈入りまくりなので、あまり、深くツッコミしないでください。

そのうち主人公その他のプロフィールも上げるつもりです。

主人公とかキヤス狐とかと比べてという感じで書いてあります。

宝石が呪力（魔力）を吸収しやすいというのはFateのアカイアクマからです。

ちなみに、そのあとの、『宝石には怨念とか運とかついている』という話は母からのジंकウスみたいなものですが、あながち間違っとなさそうなので使いました。

宝石の和名というか、漢字なんですけど、ぶっちやけ予想です。

オニクス⇨瑪瑙はあってるんですけど、ホワイトオニクス（ホワイトオニックスともいうらしいです）は和名が書いてなかったの・

瑪瑙に白つけて表記しました。

キヤス狐が宝石の種類で悩んでる文章は、私が思ってた事ほぼそのまま書いてあります。

キヤス狐っぽくなくなったらすみません。

がんばってみたんですけど難しいです。

ここで皆さんに予想をしてほしいことがあります。

上の4つの中で、キヤス狐さんがイリヤの指輪に選ぶ石はどれでしょう？

回答は、次話でしたいと思います。

でわでわ。この辺で。

8 / 11 投稿後すぐ改訂

投稿してみて気付いたミスがあったので修正しました

第六章「魔都と少女」・1日目昼・（前書き）

遅くなっていますみません。

原作をなるべくブレイクしないように書くのは難しいです。

とくに、ネギまをマンガで知っているキャラというのが居ないので、順番にチマチマやってくしかない気がします。

精神持つでしょうか？w

第六章 魔都と少女・一日目昼・

【side キャスター】

はぁ・・・今回は真面目にしていないとヤバイですよねぇ・・・？
真面目にするのってマジ苦手なんですけどー。

ですが、ご主人さまのお願いなのでこの私、がんばりますよー。

京都駅で待機していると修学旅行生らしい制服の女子がぞろぞろと
でて来ました。

あのサイドポニーは刹那です。

夕凧も持ってますし。

電話してますね・・・。

多分私に電話ですね。私に連絡をするように打ち合わせ済みです。
ちなみに今の私は変化で白いスーツの女性になっています。

髪の毛はピンクブラウンという派手すぎないものにしてみました。
真っピンクじゃさすがに、目に着きますし・・・ねえ？

私は、認識障害を解くと刹那たちの近くへ向かいます。

刹那へ接触します。

私がよく持っている扇子をわざと刹那の前で落とし、話す機会をつ
くりました。

すこし離れたトコで話をすることにします。

刹那はしっかりついてきます。

もちろん他の人にはわからないように新たに認識障害をかけ直して。

「久しぶりですね。キャスターさん」

「久しぶり。今回の事だけど、とりあえず護衛はするけど、私達が動けるのは最悪の事態だけ。基本あなたたちが動いてね。」

「はい。」

「あとこの指輪。お守り。私の一部だから呪術のサポートと連絡にも使えるわ」

「ありがとうございます。」

「何か報告ある？」

「列車の中で早速仕掛けてきました。まだからかっているだけのようです。」

「そうなんだ。あの、ネギだけ？あの子がうまくやったの？」

それに対して、刹那は微妙な表情をする。なんとなく予想はできた。対応はしたが、うまく処理はできなかったらしい。

「貴女の表情でわかった。私達は刹那以外は全く信じていないし、信じるつもりもない。私達は関西とは別の思想で動いているから。それは覚えていてね？」

「はい。わかりました。お嬢様を護るのは大丈夫ですよね？」

「もちろん。それは西からの非公式だけど正式な依頼だから、そこは大丈夫。それから、気をつけなさい、敵は強いわ。私たちは敵についても多少はわかっているけど、何事もイレギュラーはつきもの。彼女を護るのはいいけど、足元をすくわれないうちにね。危険は身内にも居るのよ?」

私はそれだけ言うと刹那の前から姿を消す。

これからは東の戦力分析に入らなければ・・・。

うーめんどくさいです。

しかし、これで頑張って、ご主人様にもっと好きになってもらおうです!!

さて、彼女たちは移動を開始したようですね。

指輪からの連絡で、会話まで筒抜け。
私って頭いいですね。

白いスーツでは目立つようですね。

長身の女、3人がこっち見てますね。細い目の方と、褐色の肌の方とあとは中国っぽい方。

たしか資料によると、長瀬楓、龍宮真名、超鈴音ですね。

うーん。なかなかできそうな人達です。できれば味方にほしいですね!。

しかし、龍さんは味方になるかもしれないですけど、楓さんは難しいです。超さんは無理でしょう。

それにしても、龍宮真名つてなんともご大層なお名前ですねー。
なんかいろいろ怪しい匂いがプンプンします。

私は彼女たちがバスに乗ったのを確認すると、物陰でハトに化けま
す。

みなさん知らないと思われませんが、ハトに変化って結構偵察に適し
てますよー？

日本ではどこにでもいますから不審に思いませんが、時速60km
くらいのスピードで飛ぶことが出来るので、車を追いかけるときは
結構いいんですよー。

ちなみに、ハトっているんなところで高級食材らしいですから・・・
。

えーっと。行き先は清水寺ですねー。

バスからぞろぞろ降りてきました。

さすがにハトが一匹でうろろしていると変に思われそうなので、大
きな木にとまると、スズメに変化します。

会話聞いてて思ってますけど、皆さん元気ですねー。

清水の舞台から飛び降りるーなんていいですけど、マジで飛ぶとか
ありえないわー。

しかも、あのデコちび、手すりに頬ずりして・・・あたまおかしい？

修学旅行にきてて恥ずかしいですねえ。

先生達頭抱えてますよね・・・絶対。

元気ですねー。次は地主神社ですかー。

あらあら。子供何気にモテテマス。

どこがいいのかわかんないです。まあ、顔は少しいとは思いますが。旦那さまにはかありませんが!!

ちなみに魂は断トツでご主人さまがイケメンです!!

『キャストさん、どこですか?』

「刹那。私はここですよ。」

スズメのまま、刹那の肩に停まります。

刹那は携帯を取り出すと、電話してるように見せかけます。

「なんか、アホばかりの居るクラスですな。」

恋占いの石って・・・恋なんて自分からむしり取るものですよー。

「すみません。」

「ちなみに、貴女の仕事仲間というのは、龍宮さんですね。なかなか出来そうです。」

「はい。その通りです。彼女は正当な報酬さえ払えば仕事はきっちりこなしてくれます。」

パンツ丸見せで落とし穴って。めっちゃ笑えるんですけど。

「しかし、金さえ払えばだれにでも付く。って感じですか?」

「そうです。」

子供が、「こちらを見ています。もしかして、私に？いや。たぶん刹那でしょう。」

「刹那は子供先生に疑われてますけど、とりあえず、誤解を解いておいて下さい。このかを護ってることと、西には居ないことを言えば簡単に信じてしまいそうです。」

「……………」

「あの子供ははっきり言って危険を呼び込む種です。このかの安全の為にはあまり近づけてはいけないと思いませんか？」

音羽の滝へみなさん移動してますね。

おさるが、お酒を用意してます。式神ですねー。あれは。なんか少しかわいいですね。

女子の好きそうな縁結び。さすが。相手もわかっているようです。

「とりあえず、今回は子供側に回るのが得策かと。たぶん、やられますけど。敵はスクナと呼ばれる古代神を召喚し操ろうとしています。このかさんの魔力で。召喚はしてもらいましょう。そのあとでこのかさん達を助けて、私たちの力を西と東に示しましょう。大丈夫です。スクナ相手なら負けません。」

「はい。」

刹那的にはあんまりいい作戦じゃないでしょう。けど、こうした方がいいんですよ。

「これが終われば、比較的安全にはなっけてきます。まあこのかの選

択次第なところもありますが。」

女子生徒は酔っぱらってしまいましたね。

「刹那。そろそろ戻って下さい。」

「キャスターさん。このかお嬢様は大丈夫なんですよね？」

「ご主人さまがこのかさんに危険なことをすると思いませんか？」

「わかりました。」

私が彼女の肩から飛び立つと、刹那は、みんなの所へ戻る。さて、次はまたハトにでもなりますかねー？

彼女たちがバスに乗ってホテルに向かうのを追いかけます。

『キャスター。どう？もうそろそろ終わりだよね。』

ご主人さまの指輪からの連絡です。

私もお返事します。

「魔力量的な話ですと、やはりこのかが一番で、その次が子供ですかねー。で、私の尾行に気づいたのは3人ですね。あとつかえそうなのは2人くらい。名前を挙げますね。龍宮真名、長瀬楓、超鈴音、古菲、神楽坂明日菜ですね。こちらには、龍宮はお金っぱいです。長瀬は微妙。超は無理でしょう。古はバカだからわかりません。神楽坂は子供側で無理っぱいです。」

『そっか、こっちはもうホテルの中だよ。刹那は説得できた？』

「はい。少し納得できなかったみたいですが。」

『あの子はまっすぐだからね。でも、こうでもしないと、東に私たちを納得させることは難しい。ここで一つどでかい実績をつくらなきゃね。』

「そちらはどうですか？」

『うん。盗聴器各部屋に設置し終わったよ。あと、隠しカメラとのリンクも大丈夫。』

「わかりました。こちらにももうそろそろです。」

『じゃ、またあとでね。』

そういつて連絡を終わりました。

帰って、ご飯とお風呂を堪能したら、今日はもう寝ます。

あしたも色々ありそうですし。

【side out】

【side イリヤ】

ふう。

キャスターとも定時連絡を終え、私は自分の部屋でくつろいでいた。

キヤスターの指輪はいい感じだ。

ホワイトオニキス

白瑪瑙の石が入った指輪で、小指用だそうだ。

セイバーは剣を握ることが多いから中指用。

ホワイトオニキス

なぜ、白瑪瑙にしたかを聞いたら、長々と説明された。

「白瑪瑙は、こういう効果があるんですよ。感情が乱れやすい人が身につけると、理性的になる事が出来るそうです。また、意志が弱い人は悪い誘惑から逃れ、自分の主張が言えるようになります。ほかに、様々な障害を払いのけ目標に向かって突き進みたい時にも大いに力を貸してくれますし、潜在パワーを強化してくれます。その為かどうかわからないですけど、「スポーツをする方」にお勧めの石だそうですよ。んえ、ここからが大切なんですけど、白は何色にも染まりやすい色であるように無限の可能性を秘めています。しかし色の中では一番明るさが高い色でもあるように、周りに左右されること無く、自分の想い、意思、自己を強く持つことができるようになるといわれます。そして持つ者をも輝かし魅力を引き出す石ともいわれます。私的には、これ以上ご主人さまに魅力が増えて私の敵がふえたら・・・」

以下略でおねがいします。

思い出すのもしんどい。

まあ、彼女がそれだけ私の事を考えてくれたのはうれしかった。

なので彼女の要望通り、左手の小指につけている。

ちなみにキヤスターも同じ場所につけている。日本では運命の赤い糸というらしい。よく知らないが、赤くもないし、糸でもないのだが。

よくわからないので聞くと、『運命なんて自分で作り出すんです。ですが、そういうものを信じたい乙女心をわかって下さい』だそう
だ。

さらに聞いたら、

『ぶっちゃけ、簡単にいいますと、私とご主人様の絆が特別であつてほしいという私の願いなのです。あまり深くツツコミしないでください。』

と答えてくれなかった。

まあ、キャスターの事は大好きなので、彼女のお願いなら少しくらいは聞く。変なことは無理ですけどね。

「奏者、帰ってきたようだ」

モニターを見ていたセイバーが教えてくれた。

「奏者、その指輪きについているのか？」

「うん。もちろん。セイバーもでしょ？」

「うむ。こちらの言葉で薔薇輝石。ギリシャ語ではロードナイトなかなかにカッコいい名ではないか！そのうえ、余の美的センスをさらに高める石とは。キャスターもよくわかつてる。そして、良い人間関係を築くのによいそうだ。余は昔、民との関係をうまくつくれなかった。まさに余の為にある石だな。なかなかいいセンスだと、余もびっくりした。」

「うん。私もそう思うよ。キャスターはなんだかんだ言っつて、セイバーや刹那のことも考えてくれて、やつさしいね。」

「余もそう思う。」

話がまとまったら噂の人物が帰ってきた。

「ただいまです。あれ？セイバーさんとご主人様、どうかなされたのですか？」

「ううん。なんでもないよ。キャスター。おつかれさま。」

キャスターは、一般客の姿をしていた。しかし、京都っぽく着物の和服美人。

「ちょーっとしつれいしますねー」

トイレに入るとキャスターはいつもの姿に戻って出てきた。

「んー鳥に化けるのは久しぶりで疲れましたー。」

いつもどおりに私の横に座る。

「ところどころ、天ヶ崎が妨害してました。まあ、いたずら程度だったので放置ですが。しかし調子にのってるようです。もしかしたら今夜ちょっかい出してくるかもですよ。」

「そっか。まあ、私だけでも大丈夫だから、二人は寝ててよ。」

「うむ。そのつもりだ。しかし、何かあれば余を呼ぶのだぞ？」

「うん。そうするよ。セイバー」

さて、そろそろ出てこようかな。

「キャスター。キャスター用のご飯はとっておいてもらってるから、電話して呼ぶといいよ。じゃあ、そろそろ行ってくる」

私は外へ出て見張りをする。

モニターの監視はセイバーに任せてある。

なのでいちおう安心ではある。

あんまりひどいことは行われないうらう。

まあ、最悪になっても何とかかなるかな。

これからは私の時間だね。

たまには私も頑張らないとそろそろいろいろとヤバい気がする。

出番とか、主人公使えねえとか言われそうぞ。

一応主人公なんだよねー。私。出番少ないし、影つつすいけどさ。

視力強化も魔力も万全。いまなら、キャス狐&赤王コンビ以外なら何とかなりそう。

あの二人と戦闘の模擬戦してたけど、バランスいいんだよねー。卑怯なくらい。

マジずるすぎる……。。

でわ、そろそろまじめにやりますか。

【slide out】

第六章 魔都と少女・1日目昼・(後書き)

前話での問題の答え出ましたねー。
当たりましたか？

友達の予想はムーンストーンでした。

はい引っかけです。

最初からムーンストーンは候補になかったです。
イメージカラーの白とは違う色になっちゃいますし。

まじめキャス狐は書くのが難しいです。

刹那は不服そうですねー。
ですが、大丈夫です。

以下ネタばれギミです

主人公の強さに惚れる予定です。
スクナ戦まで主人公引っ張る予定です。

がんばりますよー。

でわでわ。

第七章 魔都と少女・一日目夜・（前書き）

どうもです。

原作ネギま35巻発売されましたね。

私はまだ手に入れてません。早くほしいっす。

こんかいは夜あったことをかいてみました。イリヤの野望がすこしずつみえてくるかも？

第七章 魔都と少女・一日目夜・

【side イリヤ】

ふあああ。

やっぱり人間は夜寝る生き物だね。

ぶっちゃけ眠いです。

えーっと。回りに・・・異常は、まだ大丈夫・・・？

いや。天ヶ崎が潜んでるねえ。

お風呂場の近くで何するのかなあ？

おや。子供じゃん？

横にはオコジョっていう小動物いるし。お前立場的にペットでしょ。ペットも入っていいの？

ってか、お前浮いてるよな？足が底に付いてないだろ。

それにお酒飲んでるし。オコジョが飲んでいいの？

つーか二人とも。いつ人がやってくるかわからないところで魔法とかの話するんじゃないやありません。

そこに刹那登場。

タオル巻いて入れー。女の子だろーってかここ混浴だよー。

ネギ坊主。刹那疑ってどうする。担任でしょー。担任の先生が生徒疑うってどうよ？

一応二人の話声は聞こえる。聴力強化してまつから！！

天ヶ崎はじっと見てるねえ。

先に仕掛けでもしといたのかな？

狙いはこのかなんだらうけど、おんなじ脱衣所通った刹那はなんで気付かないんだろ？

坊主ー。刹那に殺気放っちゃ・・・ほら。斬岩剣でたし。

にしても、刹那も少しなまってるねえ。私より強かったのになあ。

昔は。

っーか。ネギくん。刀弾いても剣道（剣術だけど）してる人間は強いよー。

その極意は相手の動きを観ることと、相手の気配を読んで動きを読むことだからねー。

日本の遊びや武術は全部それをしてるんだよー。
握っちゃった。刹那。

あははは・・・。男の子にとっては致命的だね。

ひねりつぶすって・・・おいおい。ネギくん女の子になっちゃうのかな？

オコジヨ君。坊主は弱いんだよー。それがわかってないなんて恥ずかしいねえ。

まだ君は下の下の中くらいだよー。魔力量はいい具合だけど、制御も精神面もダメダメダメ！

私ならあそこで、武器をはずさず、相手の動きを無力化させるように、拘束するよー。

もしくはサクツとヤツチャエ！

刹那ちゃん。ネギくんの　　を初もちー（笑）

あーあ。ネギくんお婿（ry

おーい。オコジヨ。今のはネギが悪いでしょー。
勝手に疑って、攻撃しようとして人に罪なすりつけてんじゃねー。

その隙にこのかさらわれー。

二人とも遊んでるから。こんなことに・・・ってかネギ、おさるを庇うな。

あーあ。刹那がお嫁（ry

刹那、なんとか振り切って、おさる退治。

桜花斬でた。まだまだだねえ。

ちなみに最近私は二式おぼえまつたー。

なかなかアレ便利。いたずらにも使い放題。たまに、練習で、キヤス狐の下着切ってます。

いい練習なんだよ？

安物の下着買ってきて、つけてもらって二式の練習。

キヤス狐の肌も着物も切らずにその奥の下着だけ斬るの。めっちゃいい練習。

なかなか難しいんだぞ？キヤス狐も気づかないようにするのはとくに難しい。

最初のころは、

「もう、ご主人様のえっちー」

とか言われたけど、最近は反応しない。

少し残念。

ちなみに、セイバーのレオタードは斬ってないっす。

丸見えになるんで。

そんなこと思ってたら、舞台は家の中みたい。
天ヶ崎も逃げたねー。そっちに接触してみようかな？

瞬動つかって天ヶ崎の正面へ行く。

「ちあー。あなたが天ヶ崎千草？」

「だ、だれやあんた！！」

「んー。私の姿に見おぼえない？白い髪に赤い瞳といえば？」

「もしかして『血染めの雪』か？」

ぴんぱーん。

最近いろいろやってると二つ名が出来ちゃって。

名前を極力出さないからのもあるからねー。

いちばん有名なのが、『血染めの雪』で、あとは『白い死神』とか。
セイバーと一緒にだと、『不吉を運ぶ紅白』とか。

キヤスターとはあんまり表だって動いてないからね。

キヤスターはなんか『桃の毒』って言われてるらしい。

「血染めの雪やったら、赤いのはどうしたんや？」

「彼女はねー別件だよ。ところでね、取引しない？」

「取引きやて？なんなん。内容をいつてみい？」

「貴方達はこのかをさらってスクナを開封して？ただ、それは私た

ちが倒す。そして、あなたたちを匿うわ。私たちは、東とも西とも違う新しい組織を作りたいの。ただ、私たちはこのかの護衛を頼まれているから、表立ってスクナの開封が出来ないのよ。私たちはスクナを手に入れ、貴方達は身の安全とこれからする東への嫌がらせの手伝い。どう？」

「なかなか悪くない取引内容やな。」

「でも、あんたらに力を借りんでも、うちらだけで大丈夫や。」

「それは無理。このかには私が付いてるもの。貴方達が私に付く以外スクナを開封する手はない。」

「それやったら、あんたらがスクナ開封したつたらええやん？」

「ん」。それは西を完全に敵に回しちゃうからね。私としては、じわじわと西と東の力を削ぎたいの。そのためには気づかれてはならないの。」

そう。これはどれだけ私が西と東をだませるかが肝心。

今回の件が終われば、私たちは東へ行こうかと思っている。その前に戦力増強しときたい。

なので天ヶ崎を誘う。

「まあ、返事は今回の事が終わってからでいいよ。はい。これ」

一枚の札を渡す。

「傍受されない通信用の呪符いつでも呼んでね？」

私は天ヶ崎の前から姿を消す。
さて、彼女はどんな事をしてくれるのだろうか？少し楽しみ。

天ヶ崎はおさるの恰好でこのかをさらう。

電車でおぼれそうになった時は、刹那よりちょっと早く窓割っておいた。うん。溺死って気持ち悪いからね。

どこかの地方だと、海で拾って帰ると大量になるからって、エビスサマなんて呼ぶところもあるけど、私は溺死やだなあ。

ちなみに、海で溺死して腐りかけると、鯛がきて食べるらしい。なんか今度から寿司ネタの鯛が食べられなくなりそう。

そのあと天ヶ崎たちは、刹那たちと戦うが失敗。

まあ。私が睨んだのもあるのかも。

あと、なかなかの力を持つてるね。ネギクン。

でも制御へたくそー。ふつーああいう矢(？)ってのは誘導できるんだから、大きく外しといて、後ろから狙えばいいじゃん。

馬鹿だね。

ところで呪符でこのかをあやつるって言ったときは私がかなりキレた。

刹那たちの後ろ側にいたからばれなかったけど、かなり殺気を天ヶ崎にだけぶち当てたし。

まあ、刹那や子供たちが自覚したのと、刹那が子供の懐に入り込めたのが確認できてよかった。

さて、このかから逃げた刹那を追いますか。

かるく走る。魔力を足に集中させると面白いようにスピードが出るから楽しい。

うしろから、気配を消して刹那に抱きつく

「つかまえたー。」

「うひゃああああー!!」

夕風が鞘ごと私にぶち当たる。痛い。

「うー。せつたん。ひどいおー」

「いきなり抱きついておいてひどいはないでしょう。イリヤさん」

「それにしても、少しは育ったみたいですねー。麻帆良でおとこでもできたー?」

「何勝手に人の触ってるんですか!!おこりますよ!!」

「いや、ジュ ブンおこってるし!」

「おこってないです!!」

「あ、そう。で、刹那、ひさしぶり。元気してた?」

「イリヤさん……。お久しぶりです。」

屋根の上で頭を下げる刹那、しかも寝巻の浴衣が透けてる。GJ!!

「これ、きてスケスケセクシーだお」

「にやにや顔で言わないでください!!」

ひったくるように私が渡した上着を羽織る。

「はい。タオルも。抜けてるなあ。相変わらず。教えたでしょ。ま
ず内部から疑えって。今回はあの子供が元凶でしょうに」

タオルで頭を吹きながら、少し不服そうな顔をする刹那。

「しかし、関西の一部が・・・」

「それは、西が抑えられないのが悪いし、その上挑発してる東のせいでしょ？10才にも満たないガキが親書を運ぶ役目なんてさ。しかも、ナギだっけ？人殺しの英雄の息子だしねえ。西に何人恨んでる人いるのかな？」

私は刹那を挑発するように言う。現状を認識してもらわないと、刹那もこのかも危ないのだ。

「たとえば、このかを今回の敵が殺しました。何年かして、その敵の子供が、仲良くしてねー。ってのんきにやってきて、貴女は許せるの？」

そういうことなのだ。人間が理性だけで動けるなら、今回の事件は起きない。

感情があるからこそ、人間。その感情まで考えて動かなければ、私たちはこのかを護れない。

「・・・・・・・・・・」

「刹那が納得できないのはわかる。たぶん心の中で、『敵がわかっているなら、なぜ今のうちから捕まえに行かない』って思ってることもね。」

「! ! ! !」

凶星の表情。ポーカーフェイスがまだまだだね。

「今回は、西も、東も、敵さえも利用させてもらう。だから刹那。あまりこのかに張り付いちゃだめ。西からの依頼もあるから、その範囲内だね。」

納得できてない。刹那にとってはこのかはとても大切な友達だ。

「それに、そろそろこのかにかけた封印も解かなきゃね？だからあなたはここで覚悟を決めなさい。白に戻るか、黒のまま生きるか。私は白に戻ってほしいけどね。」

そう。これが刹那にとっての分岐点。

私たちと居るか、このまま東と西に隷属するかの。

このかの記憶の改変というか封印。

このかは白いころの刹那にもあっているし、私たちの事も知っている。

ただ、私とキャスターとセイバーを【思い出さないようにしている】のと、刹那は【元から黒かった】という風に記憶の改ざんをしているのだ。

それは、私たちの為でもあり、このかのためでもあるし、刹那の願いだ。

「それじゃ。またね。刹那。」

私は刹那を残して、このか達の追跡へもどる。
このかは先生のスーツで前隠してたけど、後ろから丸見えなんだけ
ど。。。。

私は、通りがかりの人を装って、このかに接触。
もちろんカツラとカラコン装備。

「あら、お嬢さん。大変そうね」

「あ、はいちょっと。。。」

「こんばんわー。」

「こんばんわ。お姉さん。どうしたんですか？」

「いやね、そこのお嬢さん、前はセーフかも知れないけど後ろは完
ぺきにアウトだから。これ、私のいつも持つてる着替え。よければ
あげるわ。Ｔシャツとスカート。とりあえず。それだけあればなん
とかなるでしょ？」

「あ、ありがとうございます。すみません。」

「いえ。いいのよ。女の子がそんな恰好じゃ危ないからね。それに
そこの鈴のお嬢さんも、良ければこの上着使って？」

私が着ていた上着を渡す。スケスケは目の保養だけど、風邪でも引

かれたら困るのだ。

「す、すみません。」

「私はいいのよ。家が近くだから。それじゃあ。」

私は驚く三人を放置して路地裏で変装をとると、追跡体制に入る。このかはTシャツとスカートよく似合っていた。うん。やっぱこのかにはスカートが似合うね。

「なんや、ええひとやったなあ。」

「う、うん。なんかいい人すぎてこわい。」

「俺っちはあの姉さん怪しすぎると思っぜ。人払い張ってあるのに。きつと敵の手先さ!!」

オコジョおー。当たらずとも遠からずだけどしよっぱなからひどいなあ。

「そ、そうかなあ？僕はいい人っぽく見えたけど。」

ネギくんは人を信じすぎ。

まあ、今回はラッキーとおもってなさい。

そのあとは何もなかった。宿まで安全だったし。そんなこんなで一日目が終了した。

私は日が昇ると二人に任せてすぐに布団に入った。

【 参 考 文 献 】

第七章 魔都と少女・一日目夜・（後書き）

なんだか、ぬこ様作のリアさんが私に宿ってる気がします。

イリヤは大魔王化なんかしませんから！！（たぶん

ぬこ様、いつも楽しく読んでます。

更新もぬこ様並みに頑張りたいのですがなかなか難しいです。

一発書きなのでw

でわでわ。今夜はこの辺で。

読んで下さる方々。いつもありがとうございます。

ぬこ様の作品は私も大好きですので、気になった方観て下さい！！

つてか私の100倍面白いと（ハードルあげすぎですか？

ともかくこれからともよろしくです。

第八章「魔都と少女」・2日目昼・（前書き）

どうも、久しぶりに連続投稿。

皆さんから感想もらつと必ず答えて、張り切って書いてしまつお調子者の作者です。

なかなか、難しいです。

とくにセイバーにモノローグ言わせるのはしんどいです。それでも楽しんで頂けたら幸いです。

第八章 魔都と少女・2日目昼・

【side セイバー】

余は奏者に言われた通りにキヤス狐と協力してこのかを見張っている。

今は、奈良公園と呼ばれる場所に来ている。

ラッキーなことに、子供とこのか刹那は皆一緒に行動している。その上、カグラザカアスナという要注意生徒も一緒だ。

奏者の報告だと、頭はバカで突撃思考だが、魔法や、式を無効化してしまう能力を持つらしい。

もし余やキヤス狐を現界させている術式がばれれば、無力化されてしまうだろうと言っていた。

まあばれないと思うが。

キヤス狐と余は別方向から、警戒している。隣り同士では、見えるものも見えなくなってしまうからな。

それにしても刹那。奏者の言うとおり、このかを少しさらいやすくしているようだ。

あやつが本気になれば、このかに手をだすことはまず難しいと思う。

刹那を無力化できなければこのかに手をだせないのだから。リスクが大きすぎる。

お？

子供が別行動をとるようだ。余が子供の方へ付く事にしよう。

ふむ。あの娘、子供に懸想しているようだ。告白しようとして失敗

ばかりだな。

大仏前で告白はアホといわざるをえんな。

うむ。

実に初々しい。

柱の穴に引っかかるのはなんともよい。

楽しませてもらったな。

ちなみに本日の余の恰好を言っておこう。

余の恰好は、緑の襟あり長袖シャツ。上に袖なしの黒パーカーを羽織っており、白い柄が入っているものだ。パーカーのチャックは大きめに開けている。乙女のいじらしさだな。下はスカートにハイソックスでショートブーツだ。

首元が寂しいので、余の剣を模した赤い剣のネックレスを作ってもらった。奏者の作品だ。さすがだな。

なかなか目だっているかもだが、気にはしていない。

手元にカメラを持っている。これは大事だぞ？観光客に見せるための小道具というやつだ。

うむ。刹那たちと接触したな。カグラザカアスナ、大きい声で人の関係をばらすでない。そういう心のないことは余は嫌いだぞ。

それにしても、子供に告白とはな……。本当に勇気のある奴だな。自覚ない子供というものは、一番怖い事が何か全く分かってない。危険を危険と知らずに足を踏み入れる。まるで、トラップの奥に何かを求めるトレジャーハンターの方がまだ安全だ。トラップがある事には気づいているのだからな。

刹那、もっといい助言をしてやればいい物を。あいつもそろそろ子

供の危険度がわかってきてもよいと思うのだが。
刹那もまだまだ子供というわけだな。刹那は何気に子供を認めてい
るようだな。

確かに、10歳を考えればよくやっている。

しかし、力を持つ者という自覚と、教師という自覚はまったくない。
10歳の子供に核兵器を持たせているようなものだ。

さて、話しているうちに子供を見つけたみたいだな。

周囲の警戒をしてないようだが、狙われている自覚あるのか？

それに、告白されて気を失っている。今は知恵熱で倒れる場合では
なからう。

余があの子供であれば、きっと、今は返事が出来ないというな。

自分は教師であるし、まだ10と若い。あと8年まってくれ。それ
でも気が変わらなければ、改めておつき合いさせて下さい。

それが余的には1000点の答えだな。うむ。

まだまだ未熟よな。

その後、子供はホテルに運ばれ、休憩をしたが、あまり良くなる様
子はなかった。

カメラをもった『ぱぱらうち』に魔法使いがばれて暴走を起こした
くらいだ。

正直にいうと、くだらないな。

まあ、その辺は奏者が何かしていたようだが……。

この非常時に弱点を増やしているのだからな。

敵が、天ヶ崎で良かったな。

余や、余の回りにいたものであれば、暗殺、謀殺、人質、搦め手は当たり前だったぞ。

その点日本はやさしい国だな。

そうそう、迷子役のキャスターと合流して嵐山ホテルに戻ったことを追記しておく。

キャスター。めんどくさい事をするな。

うむ。余のリポートはこのくらいで終わる。

そろそろ交代の時間だ。

風呂にでもつかって寝るとしよう。

【side out】

【side キャスター】

刹那はこのかの見張りをほぼ式神に任せていました。

ご主人さまの言った通りに後手に回るようにしてくれています。

式神になにかあって駆けつけても、それは終わったあとでしょうし。

しかも明らかな誘いではなく、『警戒、護衛しています。』というのがしつかりわかるからいい。

ちなみに今日の私は、鹿に化けてます。綺麗な毛並みのメス鹿です。シカせんべいは食べてません。

人が食べてもおいしいんですが、食べる気しません。

ってかツツコミしたいのは土産物屋です。シカの〇んってお菓子がありましたよ！！

どこかで、ゴリラのハナク〇つてのも見かけましたが。

お土産にはネーミングというか発想が最悪です。

開発者を呪殺しようかと思いましたよ。

このかは、相変わらず、刹那と仲良くしたくてできない感じでした。記憶封印される前は一緒に白のまままで遊んでたんだから大丈夫でしょうに。

なんでそんなに臆病になってしまったんでしょうね。

やはり子供のころのあれが尾を引いているんでしょうか？

心配です。なについて、刹那が私たちの所に戻れるのか。

ある意味、人外同盟みたいなものですから私たちは。

さて、このかの護衛は大丈夫そうですし、刹那を見に行きました。

刹那は何故か座敷わらしみたいな子……宮崎のどか……でしたっけ？……に恋愛相談。

お？セイバーさんいますね。なら私はのんびりシカライフ満喫しましょうかねー！。

さて、どこを回りましょうかねー。

とかおもっていると、雄のシカがやってきました。なんか求愛されます。とりあえず逃げます。正直うざいっす。

私はご主人様一筋なんです！！

ヘルプミー！！助けて下さい。

とりあえず、人もシカも巻いて私は人間に化けます。ちなみに今回は男の子です。狐色の髪の毛の少年です。

服は、クラッシュジーンズに大き目スニーカー。上は外が白で袖にチャックのついてる服です。中に黒いのを着てるので、上着のチャックは空いてても大丈夫。というかそういう仕様です。

そしてベルトを腰に交差させるように巻いてあります。まあ、ベルトの意味をなさない、飾りベルトなんですけど。言葉で説明するのが難しいですね。まあ。いいですか。

いろいろ廻ってみますが、結構面白いです。

ってか、このかは一人ぼっちでかわいそうです。しょうがない。声をかけますか。

「おねえさん、ひとりなの？」

「そっなんよー。うちが遅いから置いて行かれたんよ。ぼくはどしたん？」

話しかけると意外と警戒心なく話してくれる。

「ぼくも、シカに追いかけてまわされたらお姉ちゃんとはぐれちゃった。」

今回のお姉ちゃんは、セイバーのことだ。指輪で通信してそういうことにしておこう。

『セイバーさん。今日は私のお姉さん役でお願いします。このかに接触してます』

『!!!???ちょっとまって、余はお主が何に化けているかわからんだぞー!!!』

『狐色の髪の少年です。指輪で連絡とれますから大丈夫でしょう。』

「じゃーうちとキミのお姉さん一緒に探そうか」

「ほんと??さがしてくれるの?」

セイバーとこのかの会話を同時進行はなかなか難しい。

『むむむ・・・わかった。このかと一緒にはぐれた姉を探す』設定
『なのだな』

「ええよ。はぐれんように、手つなく?」

『はい。そういうことです。それでは後ほど』

「いいの??おねえさん??」

「もちろん。ジュースでも飲もか？」

「あ、じゃあ、アイス食べよう？僕ね、お姉ちゃんからお小遣いもらったから、御礼におねえさんに買うよ！！」

年下におごってもらうわけには行かないので、かなり強引だが私が買った。

そのあと、時折、連絡を取り合い、このか達の時間の間につまく出会わないように調節して、その日はすごしました。

正直、疲れた。めんどくさいったらありゃしない。

たぶん。もうしない気がする。

帰ったら、温泉入ってねますもつ。

【side out】

第八章「魔都と少女」・2日目昼・（後書き）

相変わらず、BGMを聞きながら書いてます。

だいたい、ヘッドフォン推奨の音圧高めのものですが、今回はバンドでもそんなに音圧が高くないシットリ系の曲です。

曲名を紹介できないのが残念ですが、主にニコニコ動画で探してます。

ニコ動でも同じ名前で活動中です。

BGMに興味がある方はそちらを見てみてください。

ちなみに動画は投稿できませんでした。

しょぼん・・・

ではでは。感想、評価お待ちしております

第九章↳魔都と少女↳二日目夜・(前書き)

BGMさいこーで、はかどってます。

二次創作の方だけ………

今回は3000字ないくらいです。

でわーどうぞー!!

第九章 魔都と少女・二日目夜・

【side イリヤ】

簡単に今日の報告をお互いにしあって、セイバーとキャスターには寝てもらった。

たぶん、昨日の今日では相手も自重するだろうという読みだ。

監視カメラでみてたけど、このクラスの馬鹿さ加減は少し異常でしよう？

パパラッチ、あんたは落とし穴にはまりかけですよー。

内緒にしてやるって立場違うっしょー。

むしろ、今すぐ転校して逃げるような立場だべ。

あの馬鹿オコジヨロだけは上手いのねー。まったく。逆にそこまでうますぎると、惚れ惚れするね。

っーか、仲良くなったとこって、他のやつらと仲良くないみたいじゃない？

先生としていろんな生徒と平等に仲良くならなきゃだめでしょ？

はあ。まったく。あの餓鬼。ちょっと殴らせてー。

朝倉にも接触するかなあ。

あいつ何気に情報網すげーし。ちょっとこっち側着いてもらうべきかも。

うん。決定。

あの突撃っぷりはみていきもちいい。後々つかえそうだし。

温泉から出た朝倉に接触。

「こんにちは、いやこんばんわかな？パパラッチこと朝倉和美さん」
ぎよつとした表情になる。

「こんなところでは人目があるから移動しない？」

「あたしがついていくとでも・・・？」

「付いてくるわよ。私も、貴女が知りたがっている存在だからね。」

「やい。てめえ！！なにもんだ！！」

オコジヨが私に食ってかかる。

「脳みそが足りない小動物は黙ってて。味方を敵とまちがって、子供に吹き込んで誤解を招かせるようなバカなオツムには興味ないし。むしろ、オムツをしててくれた方が助かるわ。下着泥棒の常習犯さん」

オコジヨにクリティカルヒットのようだ。
オコジヨはひるんだ。

「で、朝倉さん、付いてくる？」

「旅館の中なら。いいけど。もう時間が時間だし。」

「んーじゃあ、屋上にでも上がりましようか？あそこなら、中だけど外だしね。」

「へ？どうやって？」

「こつち。」

彼女を旅館の外に連れ出し、人に見えない死角へ連れ込むと、御姫様だっこ。

まだキャスターやセイバーにもしてない貴重だぞ？あの二人に知られたら殺される。

「舌を噛まないでね？」

「へっ？？」

魔力を足にためると跳びあがる。屋根や電柱、たまには壁なども使って、屋上へ上がる。

「~~~~~っ！！！」

「ほら、ついた。」

時間にするなら、20秒ほどで屋上へ到着。

「さて、まず、オコジヨの質問に答えておくれ。私はとりあえず中立存在かな。今の所だけだけ。そして、魔法使いみたいなものかな。」

「みたいて何さ？魔法使いなら魔法使いって答えたらいいんじゃない？」

ない？」

「私のは全て、オリジナルスベル独立魔術だからね。あと、朝倉さん。やめといた方がいいよ。こっちがわ魔法使いにかかわるの。」

オコジヨはあんまり私を信用してなさそうだ。まあ、いきなり私が出て来て面白くないことを言ってるからだろうけど。

「私が貴方達に接触した理由は2つ。朝倉さんに、情報を流してほしいのと、ネギ君がこのかに近づくのを止めてほしい。」

「私の情報網もあなたたちのに比べると大したことないんじゃないの？それになんでこのかなのさ？」

「んーとね。朝倉さんの情報網は結構私たちには重要なものよ。自分で気づいてないと思うけどね。だからあなたの持っている情報を全て私たちに流してほしいってわけ。」

うん。東は独立した学園都市なので、情報が外部に漏れにくい。裏の情報は刹那から入ってくるが、表の情報に詳しい人間が一人ほしい。

なかなか難しいところをなのだが、ちょうどいいところに朝倉さんの登場というわけだ。

「このかについては、このかの父親に頼まれたからって言うておく。正式な依頼よ。このかの護衛は。オコジヨ君。あなたネギとこのかをバックテイナー仮契約させようとしてるでしょ？それはやめておかないと、呪殺するわよ？」

さつき、オコジヨの毛をもらっておいたから。キャスターに頼めば大丈夫だしね。

「……ねえ。あんたは魔法についてどれくらい知ってるの？」

「私知ってるのは、敵がこのかを狙っていることと、ネギ君の実力じゃ足りないこと。にわか仕込みの戦力じゃ、足手まといだし。」

「白い姉さん。あんたもしかして、最近噂の血染めの雪ってやつか？」

「よくしってるねー。カモくん。」

「血染めの雪って何よ。カモっち。」

「最近まほネットで騒がれてる人さ。西に厄介になってるらしいが、本来は中立。ただ、依頼はきっちりこなしているらしい。赤い剣士と一緒に事が多く、剣士はめっぽう強くて、白いは未知数だそうだ。」

「意外だねー。なるべく知られないようにしてたのに。全部正解だよ。少し足りない情報もあるけど。」

「んで、私たちが貴女の要求をのむことによるリターンは何？」

「ついでに貴方達も護ろうかと思って。正直私が護るのはこのかオソリー。他のやつらは死のうが生きようが、燃えようが潰れようが、石になるうが、

関係ないんだけどね。とりあえず、生きてる保証かな？」

スクナ出てきたら勝ち0%だろうしねー。

「あとね、朝倉さん、ネギ君に近づくことは死に近づく事ってわか
ってる?」

「どういことさ?」

「カモくんはわかってるでしょ。ネギ君がまだまだヨワヨワってこ
と。私たちはしようと思えば今回ネギ君を殺せる。今ここからだっ
てね。確かにネギ君は強くなる素質あるよ。でも。まだまだ弱い。
体術も魔法も、心も弱い。そんなネギ君が貴方達一般人を守れると
思う?」

その上、あの子は……。

「しかもあの子は力の使い方がわかってない。あれは無差別殺害兵
器よ。大人が言ったことが正しいかどうか分からず、正義の魔法
使いになるために必要だからといわれて、悪い奴らをたおしに来た
気分なんだろうけど、私から言わせれば、汚い大人が、自分の手を
汚したくない為に言ってるお為ごかしを実行してるマシンよ。」

「そ!そんなことは!」

朝倉さんが否定するが、私はさらなる事実じじつをぶつける

「カモくん、今回の特使だって、東の長に言われてそのまま素直に
実行しただけなんでしょ?それが東の都合のいい嘘だったらとか考
えないの?」

オコジヨは苦虫をかみつぶしたような顔をしている。

「じゃあ、そろそろ戻らないとね。貴方達も心配されるから。あ、これ、私のケータイ番号とメルアド。いつでも相談には乗るよ。」

「・・・はい。」

「あと、監視カメラと盗聴器仕掛けてあるから、下手な嘘はこのホテルでは使わない方がいいわよ。」

大分憔悴してるようだった。私は彼女たちを風呂場の裏手におろす。

「じゃあ。考えてね。」

私は周囲を軽く見回ってから自分の部屋へと戻る。

しばらくしたら朝倉とカモからメールが届いていた。監視カメラと盗聴器を使わしてほしいと。イベントをするらしい。

まあ、別に構わないから貸しておくことにしよう。

ちなみに、この後、イベントやって、のどかという座敷わらしみたいな子と仮契約パクティオしてた。

あとは、学園広域指導員の先生に正座させられていたことをここに書いておく。

刹那もあんなもの貸すなよなー。

書き方とか詳しく教えるよ。貸すなら。

【side out】

第九章↳魔都と少女↳・二日目夜・（後書き）

伏線回収？w w

朝倉達の監視カメラはイリヤのを改造しただけでした。

まあ、イリヤの性格変わってる気がするけどキニシナイ！！

次話は、頭の中で少し構想がある程度です。近いうちにまた投稿すると思われませう。でわでわまた。

第十章 魔都と少女 3日目昼 前(前書き)

予想以上に長くなったので、少し分けます。

1日に5000字超えはしんどいです。

第十章 魔都と少女 3日目 昼前

【side イリヤ】

朝倉達のたくらみというか、イベントを止めておけばよかったと今更ながら後悔。

宮崎のどか、アーティファクト手に入れてしまった。

正直、私の見通しの甘さというか、朝倉のしぶとさを見誤っていた。とりあえず、私達はホテルを引き払い、総本山の私たちの部屋へと戻る。

「お久しぶりです、イリヤ君」

長がわざわざやってきた。

「おーっす。眠いんでー。早めに話を終わらしてくれと助かるっす。」

セイバーとキャスターはもう尾行を始めているので、私だけだ。

「どうですか？彼の息子は？」

「だめ。全然だめ。魔力タンクって認識しかないな。まあ、あなたの話の中のナギと似てるっちゃん似てるかも。思い込み激しいことか」

だって、今日も子供とこのか、刹那と一緒に行動してるんですもの！！

最初は子供とカグラザカアスナが西に行く予定だったのだがこのかたちに見つかってしまっただらう。

宮崎ノドカという要注生徒も一緒だ。

朝、アーティファクト呼び出してたし。

たぶんこちら側にかかわってきそうな予感が巫ン！って鼻に着ます！！

刹那、スカートにスパッツ、制服は評価しますが、カグラザカアスナ。その服はダメでしょう。

女の子としてはアスナのが得点は高いですが戦闘員としては低いです。

ちなみに、今日の私の恰好は、赤いタンクトップ・・・ちゃんと胸のトップついてますよ？・・・に黒に赤の柄のパーカー下は黒いジーンズに青いスニーカーです。コムバースのハイカットのやつです。お気に入りですよ。

髪はポニーテールですが、そんなに髪が長くないので肩口で終わりです。髪の色は相変わらず狐色です。

このかに会ったときは顔を変えてありますし、わからないと思うんですが。目の色は今回水色にしてみました。

昔は嫌いでしたが、変化もやってみると結構楽しいです。

セイバーさんも別方向から護衛。絶対に人ばれはしない自信あります！！

会話聞いてると途中で抜け出して行くようです。

『別れた場合、私はカグラザカアスナの方に付きますね。』

『了承した。このかの護衛は余に任せよ。』

うん。これでおけーですねー。

あの触覚おんな、いいこと言いますね。

私もカグラザカアスナは子供を愛しちゃってると思いますよ。だって、あの保護欲はいじょうですよ。

プリクラですか。いいですねー私も取りたいですよ。

ご主人さまとのチュープリとか……キャッ！言っちゃった！！

ま、まあそれは今度の機会に置いといて、セイバーさんもゲーセンに入りましたね。

お。f a t e ? u n l i m i t c o d e があるじゃないですか！！あれなかなか面白いんですよー。隠しキャラとかいたりして。

それは置いておいて、みんなでプリクラ取った後は、魔法使いゲームですかー。

のんきですねー。ネギ君も参加しちゃって。

うん。あれは天ヶ崎チームの下っ端わんこ！！

犬は嫌いです！！

でも、ご主人様は天ヶ崎のチームを取り込みたいみたいなんですよねえ。

どうする気でしょうか？

お、ネギ君ゲームで負けちゃいました。

狗神使いが魔法ゲームで魔法使いに勝つって……。

ネギとアスナが刹那とこのかを置いて動きましたね。

お？関西呪術協会が勢ぞろい。

出て行った方がよさそうですねー。

『セイバーさん。まかせます。』

『うむ。その方が適任だろうな』

セイバーさんとの通信を切って私は鳥に変化します。今回は燕です。
低く飛んでもあんまり変に思われませんか。

追いかけるのでしょうか。

【side out】

【side セイバー】

キャスターとの通信で余がこのかと刹那を護る事に決まった。

関西呪術協会のメンツもそろってるみたいだし、奏者が顔合わせた
なら余も顔を出しておくか。

「後ろから、失礼するぞ。」

天ヶ崎達の後ろに気配を消して立つ。服装は余の戦闘服。

「あ、赤い露出狂！！もしかして紅白の紅のほうか??」

狗が余を指さしして答える。

「ほう。余の事は有名と見える。よきかなよきかな。天ヶ崎。やめておけ。そんなことで復讐しても意味がないぞ。こちらにはスクナを無力化する手立てがいくつかある。白い少年。君が一番強いようだが、余と奏者たちにはかなわない」

「そんなんあらへん！！こちらは・・・うちは・・・」

「神鳴流にきても似たようなことを鶴子に言われていただろう。」

余はそこで突き放す。

「まあ、余は陰で何かをしても感知せん。ただ、余の奏者が怒る様な事をしなければな。」

そういつて余はまた姿を消す。このかたちの所へ戻る。

余達は基本的に監視と自衛しかしない。

そういうことにしてあるのだ。

このかは久しぶりに笑顔だ。それはそうだろう。刹那が一緒にいてくれるのだから。

お。式神を飛ばすのか。ネギたちの所へ。

ちび刹那。本物もあれくらい明るければいいのだが。

【side out】

【side キャスター】

ツバメへの変化で、ネギとカグラザカアスナが乗っている電車を追いかけます。

二人は気づいていないようです。

二人はとある駅で降りると、？毘古神社へとやってきた。

総本山のある場所なのだが、今日は様子がおかしい。なにか術の気配がする。

ちび刹那がやってきた。

私は狐に変化し、二人のもとへ。今はしっぽが4本しかないが、まあ、多少は大丈夫でしょう。

ちなみに、狐に変化した私の体調は日本に古くからいるアカギツネの3倍位のサイズ。まあ。尻尾の長さ含めて4m級の狐なんて見ないでしょうけど。

「けーん!!」

ちび刹那に近づいて鳴きます。

「キャス狐さん!!」

刹那。その呼び方は……；；；
まあいいですか。

「ちび刹那さん、このおおきな狐さんはお知り合いですか？」
ネギ坊主が問いかけます。

『私は、刹那の親みたいなものですよ。』

「尻尾が沢山あるんだけど、あんた妖怪？」

『失礼な。尻尾は人に分けてあるから今は少ないですが私は神に分類される神聖な狐です。お稲荷さんモデルは私ですよ？』

ごめんなさい。ちょっとハツタリかましました。

お稲荷さんのもとは私かもしれないという説があるだけで、明確にはそう言われてません。

「へえ。そんな狐さんがどうしたんですか？」

「そうだな。そんな妖怪がなんで兄貴の所へやってくるんだよ！！」

「カモさん！そんな言い方しないでください！！」

ちび刹那がかばってくれます。私は、親愛を込めてちび刹那の頬をひと舐め。

『まあ、この先にいる私の天敵を殴りたいのが本音ですかね。』

狗の匂いがプンプンする。

「やっぱり、敵が居るんですね。」

『私の鼻に巫・ン！って感じですよ。』

「そうですか。トラップはありそうですか？」

『いまはないですよ。この先にある感じですよ。お二人とも背に乗って下さいな。本来はご主人様専用なんですよ！！ありがたく思いなさい！！』

「えとえと・・・ありがとうございます？」

「ありがとうございます！！」

『ちび、あなたは私の額にでも』

「はい。キャス狐さん」

私は、スピードを出した。背中の子が吹き飛ばされないように気をつけてますよ。

んで、何本目かの鳥居の前で急ブレーキ。

ネギとアスナ、ちび刹那が急ブレーキに耐えられなくて前に吹っ飛ばされ、トラップの中へ。

やばー。

まあいつか。さて、ちび刹那と一緒にこれを解除しますか。

前足で、印と思われるものを傷つけて無力化。柱の方は二本とも終わりましたが上のがめんどくさいですね。

とりあえず、ジャンプで上に登ると、尻尾の狐火でもやしちやいま

した。

そのまま中へ。今頃ネギ君は狗と戦ってるでしょうね。

中では体感時間が数倍でしょうから。大変なことになってないといいますが。

【side out】

【side セイバー】

刹那たちは、月詠に狙われている。棒手裏剣という忍者の武器が投げられている。

刹那がそれを必死にさりげなく防いで、友達を引き離しシネマ村に入った。

少しの間、二人は仲良く昔のように遊んでいた。幸せそうな刹那を観ると余もうれしい。

甘食の一発ギャクは余も笑った。

他の観光客に写真を撮られてうれしそうだ。あんな幸せそうな顔・
・・。

な、泣いてないぞ！！余は泣いてないからな！！

こほん。そこに邪魔者・・・もとい月詠参上めんどくさー。

シネマ村の正門横の日本橋で決闘か。余は眺めるだけか。退屈だな
うん

刹那は取り巻きに囲まれて困ってるな。

もしものときは余も出るとしよう。

さて刹那に接触するかな。
囲まれて大変そうな刹那の目を余に少しばかり向けてやらぬと。そ
してこのかを護るのが余の役目なのだから。

「刹那。せーっーなー！」

大きく手を振る。

刹那たちは私に気づいたようだ。

「セイバーさん!!!」

余はるろうに〇心みたいなた好をしている。

浪人の恰好をしている。剣は背中に背負うようにしてあり、胸元を
大きくはだけさせてある。髪はポニーテールにして。

「なにになー？桜咲さんしりあい？金髪美人の剣士さん？」

「うむ。余のことはセイバーと呼ぶがよい。」

「朝倉、昨日は奏者と楽しかったか？」

「!?!」

朝倉は昨日の事を思い出したらしい

「あら。和美つたら昨日何かあったのかしら？」

「なんか私の知らないところで何かが進行してる気がしてしょうが
ないよー。」

「まあ、余は刹那の姉というか保護者だ。」

「じゃーこのかも知ってるの？」

それを聞くな。触覚娘。後姿がGに似てる気がするぞ。

「うちは・・・あれ・・・？」

「刹那とこのかはよく遊んでいたが、余はこのかの所へはほとんど
いっておらぬ。だから覚えておらぬだろう。」

それは嘘だ。このかも沢山一緒に遊んだ。しかし余のことは覚えて
ないはず。そういう封印だ。

「まあ、刹那。このかは余が護るからな。安心しろ。」

「ありがとうございます。」

「うむ。では参るぞ!!--」

「勝手に仕切られた!!--」

【side out】

【side キャス狐】

正直、やられたっておもいました。

宮崎のどかに話しかけられた時、心臓飛び出るかと思いましたが。

「あのー狐さん、ネギ先生達はこの中にいるんですか？」

それは意外と柱に掛けられた術がめんどくさくて呪を唱えてる時でした。

『宮崎ノドカ！！なんでここに！！』

「あ、私の名前しってるんですねー。はい。宮崎ノドカです。狐さんの名前はなんですか？」

『その日記で見られたら嫌なので通称でいいですか？』

「！！しってるんですか？」

『まあ。一応は。私はキャス狐かキャスターって呼んで下さい。あんまり有名なので実名は控えています。』

「尻尾が4本あるってことは、天狐さんですか？」

なんでこんな余計な事知ってるんですか！！頭の中がういき〇いあですか！！！！

あれは便利ですよー。作者もよくつかってます・・・。

っは！！私は今何を！？

『とりあえず。キャス狐かキャスターと呼んで下さい。』

「は、はい!!」

尻尾から狐火を出しながら言うつとわかつてくれたみたいです。
軽い脅しは気にしないでね。

『私の背中に乗って下さい。護りますから。』

「あぶないんですか？」

『ええ。下手したら死ぬくらい。』

私が伏せると横座りで私に乗る。本はもったまま。

『落ちないでくださいね。』

そういうと私は入口から入るとすぐに風下の森へ入った。
相手は狗だ。匂いではれる確率も0じゃない。

だから、私は竹林のなかを猛スピードで走ります

『舌嚙まないでくださいね』

「は、はい。なんか河原にいるみたいで先生達」

『了解です。スピード上げますよ』

たぶん時速60km位出てると思う。

直線距離で60なら車やバイクでも出せるでしょう。でも、竹林の
中を縫う様に駆け抜ける60kmは人間未体験でしょうねー。

数十秒後、私たちは子供たちと合流できました。

「ねぎせんせー！」

「本屋ちゃん！！」

カグラザカが私を睨みます。

『貴方達がつけられてたんですよ。昨日のパクティオーのせいのおうですから。私のせいにはしないで下さいね。』

「ぐ……っ」

カモにクリティカルヒットのようだ。

『むしろ、この子を護りながら来た私に御礼の一つがほしいです。』

「そうですね。すみませんでした。あと、ありがとうございます」

「わかったわね。」

『あと、その子のアーティファクト、強力ですから使った方が得です。というわけで、宮崎ノドカさん。犬上小太郎の心を読んで下さい。』

ノドカさんは素直でいい子です。私の言うとおりにしてくれます。さて、ここから犬に反撃ですよ。

【side out】

第十章 魔都と少女 3日目昼 前（後書き）

ちなみに、今日はイリヤとキャス狐のプロフもまとめてました。

たぶん全部で1万字位書いてる気が・・・

お尻が痛いです。……

イリヤたちのプロフは、自分の中の賭けに勝つたら上げます

それは、お気に入りか200を超えることです。

がんばりますのでよろしくです!!

第十一章 魔都と少女 3日目 昼 後（前書き）

七千字いきましたー！！

過去最高字数です。やっぱりお尻痛い。

第十一章 魔都と少女 3日目 昼 後

【side セイバー】

余とキヤス狐が連絡を取り合うと、キヤス狐達も敵と戦っていた。あちらには犬が一匹だからすぐ終わると言っていた。

ということはこちらが本命だな。月詠以外にもいる。刹那は月詠の相手。となれば余がこのかの護衛だな。

シネマ村の日本橋に皆が来る。

このかは余の後ろに控えてある。

「ふふふふふふ……」

この声は。月詠の……。

「ぎょーさん連れて来てくれはっておおきにー。楽しくなりそうですな。」

その間延びした喋り。お前の声だと余は好かぬ。

「ほな、始めましょうかー。せんぱい……。」

余も一応神鳴流を修めているのだが、余もせんぱいに入るのか？

「このか様も刹那せんぱいも・・・まとめてウチのモノにしてみせますえー。」

良かった。余は入っておらぬらしい。

「ふふふふ」

「せ・・・せつちゃん・・・あの人・・・なんかこわい・・・き、気をつけて」

「安心して下さい。このかお嬢様、何があっても私がお嬢様をお守りします」

刹那。余よりいい場面持っていきおつて・・・でも許そう。

刹那とこのかには思い出がある。余とこのかには・・・無いも同然だ。

「せ・・・せつちゃん・・・」

回りが騒がしくなる。余もいい場面ほしいではないか!!

「くあーっ!!」

「えっ!!」

横の刹那がビビる。

「あのなあ。刹那。余が居れば100人力であろうっ?」

「あ・・・すみません。」

「二人だけの世界に入る前に余を思い出せ。師というか姉というか親というか、ともかく余は寂しい!!」

「桜咲さんに対してデレだー!」

早乙女ハルナ
G女うざい。

「それとも余が月詠とやろうか?」

「いえ。あいつの相手は私が。」

「ふふふ。そちらの異人はんもたのしそうですなあ。うちはどちらもイケますえ・・・?」

だから気持ち悪いからその喋るのをやめんか。

「刹那。余はアイツ嫌いだ。よって、死刑執行。出来なければ余が刹那に地獄の特訓を敷いてやる。」

うむ。これでいい。

「ええええー!!!そんなむちゃくちゃな!!!」

「さて、刹那、行ってこい。」

「月詠、セイバーさん以外は・・・!!」

「ハイ。先輩、心得てます。この方たちには私のかわいいペットがお相手しますー」

大量の呪符を取り出す。あれなら皆に任せられそうだな。

「ひゃっきゃこお〜」

・・・おまえはぬらりひよんか？百鬼夜行を統べるものといえは・・・ぬらりひよんだぞ？

他のやつらはスカートをめくられたり、服脱がされそうになっているが、余は知らぬ。

「セイバーさん、このかお嬢様を連れて安全なところへ逃げて下さい。」

「余に任せよ。このか、行くぞ。」

「あ・・・うん。わかったえ。セイバーさん」

・・・このかにそのように他人行儀な呼び方をされると少し、がっかりだな。

仕方のないこととはいえ。正直寂しい。

二人で手をつなぎ走り出す。

余は泣きそうになっただけだが、そんな顔は見せられぬ。護るものが泣いていては、護られる者はどれだけ不安か。そうだな。余はないではおらぬ。泣くわけがない。

「せ、セイバーさん。」

「セイバー。と呼び捨てにして構わぬ。」

「・・・じゃ、遠慮せえへん。セイバー。私セイバーを知つとる気がするんや。」

「そうか。それより、敵が城へと追いつめようとしているな。ここは誘いに乗ってみるか？」

「セイバーはどっちがいいとおもうん？」

「んー。余的には誘いに乗った方が敵の事がわかるから良いとは思う。仲間からの連絡でこちらが本体というのはわかってるからな。」

「あ！セイバーは昨日の男の子のお姉さん！！」

「まあ、それは今は忘れよ。」

「はい。」

めんどくさい事を思い出す。あれは忘れてほしい事だったのに。あの後キャスターが報告で面白おかしく奏者に話おって・・・。

「ともかく。誘いについてみるか？」

「はい。わかりました。せつちゃんが護ってくれる言つたし。セイバーもいらっしやるから大丈夫ですよね！！」

「余は誰にも負けぬ。」

敵の誘いに乗り、城を上へ上へと上がっていく。いちばん上の階に、天ヶ崎千草がいた。

このかを背中に庇いながら、余は言い放つ。

「天ヶ崎千草。先ほどの余の発言も聞かず、いい度胸だ。余が直々に断罪してくれよう。」

「うるさい！！うちは、うちは！西洋魔術師に・・・あんたらにわかってたまるか！！動いた瞬間、お嬢様を打ち抜いてやるわ！」

睨みあいながら、余はこのかを護るように剣『アエストウス韻鉄の韃エレストウス原初の火』を構える。

それを観た鬼が矢を放つ。

余はそれを一步前へ出ながらたたき落とす。

「こんなもの・・・！！」

次へ次へと降ってくる矢を2射目で降はその場から動かさず全てたたき落とす。

しかし、それでなにかが変わるわけではない。

余は、一步下がりが、このかを腕に抱くと、窓の格子を破り、外の屋根へと踊りでる。

「きゃっ・・・！！」

このかが悲鳴を上げるが構っているわけにはいかない。

なぜなら、そこには天ヶ崎千草ともいにいた、白い少年が居た。こちらの方が厄介だ。

余はこのかを背に庇いその少年と対するが、千草が上がってきたので、少年は一步下がりが後ろに控えた。

今はまだそこまで戦う気ではないらしい。

下の群衆がうるさい。見世物に見えているのだろうな。だとしたら余は千両役者というやつだな。

「お嬢様!？」

刹那の声が聞こえたが構っている暇はない。

「聞ーとるか。お嬢様の護衛、桜咲刹那」

刹那を無力化する気らしい。

「聞くでない。刹那!余を信じよ!!!」

「それは護衛の自由やけどな。この鬼の矢が二人をピタリと狙つるのがみえるやろ!お嬢様方の身を案じるなら手は出さんどき!!!」

刹那はこの女の言うことを信じてしまう。是が非でも余がこのかを護らねばならぬ。

「セイバーやったか?赤いの。一步でも動いたら射たせてもらいますえ。さあ、おとなしくお嬢様を渡してもらおうか」

「大丈夫や。せつちゃんが何があっても護る言つたんや。必ずせつちゃんが助けてくれるて。」

余は刹那より信頼されてないのだな。信頼するべき絆を隠しているから仕方ない。ならば、ここは余が護らねばならぬ。

「ミュージズの加護を・・・至高の芸術を護りたまえ・・・」

余は豪華絢爛を信条とする上、こういうのは好かぬのだが・・・
小声で唱える。

インウィクトカ区リートウス
「三度、落陽を迎えても・・・」

次の瞬間、風が余達を襲い、バランスを崩したところに矢が迫ってこのかを護るため余は敵に背を向け、このかをその腕に抱く。背中に矢が刺さり、痛みを悶えた。矢は、余の体をさいわいにも突き抜けなかった。

余の体を盾にして、このかを護りぬいた。

ほら。余が居れば、1000人力であろう・・・？

【side out】

少し時間を戻して

【side キャス狐】

「きます。近いです」

ノドカの声とともに私たちの体に、さらに力が入ります。

私はしっぽの力で、奴の犬神に対抗すべく20の軍を作ります。

子供が四発の魔法を放ちます。それを防ぎ切り、私の軍に突撃。

予想どおり犬神が、それにあたり、私と魔力を自身に課した子供と

でたこ殴りにかかります。
アスナはノドカの護衛です。

「キヤス狐さん右です。ネギ先生そのあと左です。」

ノドカの指示は的確に行動を読んでもくれるので助かります。

「離れて!!」

私がネギに指示し、その瞬間、狐火で燃やします。青い焰は犬の体を包みました。

「くっ・・・狐え・・・何モンやてめえ。」

「私は有名すぎるので名乗りません。ただ、桃の毒という通り名だけお答えしましょう。」

そして私は人の姿をとる。
着物の黒い帯に書かれた尻尾の模様を観てノドカは気づいたようです。

「あなたは・・・金毛の・・・」

「ノドカ。言わないでくださいまし。今の私は軒轅陵墓からやってきた良妻狐なんですから。」

「へえ。有名な狐らしいけどな。女殴る気せえへんわ」

私は再び化けます。昨日化けた男の子へと。

「わがまま僕ちゃん、それならこの姿なら君の御所望通りだろう？」
喋り方も男っぽく変えて見せます。
安部の奴の喋り方のそのままの真似なんですけどねー。」

「うわー性別まで思いのままって、すごいわねキャスターさん」

「日本の狐ってすごいんですね。」

子供、ちげーから。私がすごいんですよ。

「けっ。結局中身女なんだろうっだったら変わらんわ!!!」

犬が獣化します。パワーとスピードアップスキルつてずるいつすよねー。

「でしたら、私も本気であたらせてもらいます!!!いざや散れ、常世咲き裂く怨天の花……………常世咲き裂く、大殺界!!!」

ネギたちが後ろにいるのをいいことに常世咲き裂く、大殺界を炸裂。

「さらに行きますよ!!!炎天よ!奔れ!!!」

「あ……………ああ……………」

ノドカさんがなんだか感動してますけど。私ってそんなに有名なんですかね？

「ぐぐぐ……………」

犬はこらえきれずに倒れたようだ。

「これで一安心ですね。」

私は再び狐に戻る。

その白みがかつた顔を見てノドカはやっぱりという顔をした。

「キャストさん。あなたは・・・やはり。」

「ノドカさん。あまり人の名前を言わないでください。対策が立てられてしまいます。あなたが知っているくらいなら私の知名度もそこそこあるでしょう。でしたらなおさらです。」

「あぶぶぶ。」

『こちらキャスト。こっちは犬一匹駆除終了。トラップもあつたので足止めと思われる。そちらが本体だと。以上通信終わり。』

「ねー。本屋ちゃん。このキャストさんって有名なの？そんなに？」

「そうなんですか？キャストさん」

「わかりません。ただ、ノドカさんは知っているってだけでしょ。」

「ははははい。そそそそれは有名な方です。ある意味、日本ではカニサマですよ！ー！」

「え？もしかしてお稲荷さんってキャストさんのじんじゃ？」

「ええー！！そんなすごいカミサマなんですかキャスターさん。」

「いえ。私は人に成りたかったただの狐です。あんまり気にしないでください。ふつーにしててくれればそれで構いません。」

そう。私は天照の分御霊。人を知りたくて人になろうとしたおバカな狐。

だから人に混ざっていきることが出来れば、ご主人様に仕えることが出来ればそれでいいんです。

「でも、そんな偉いカミサマがなんで私たちの味方してるんですか？」

ネギ君鋭いね。

「私の旦那様のお願いですから叶えないわけにはいかないじゃないですか。」

「旦那さまって・・・」

まあ。ともかく。

「まあ、ここを出て休憩でもしましょうか。」

私たちはゆつくりと境界の鳥居を越え、近くの河原へと向かった。

【side out】

「……このか……余の名を……」

「よかった……ルキア……」

近くの地面へ着地。私もそこへ駆けつけます。

「お嬢様力をお使いに？」

「せつちゃん。だいじょうぶやってん？うち何が何だかわからんでセイバーが傷ついた瞬間、うち……。大事なことを忘れとる……」

「とりあえず。余はもう大丈夫だ。キャスターと落ち合って、西へ向かった方がいい。奏者もそこにいる。」

「そうですね。お嬢様。いまからご実家に参りましょう。」

【side out】

【side キャス狐】

刹那やセイバーさんたちにあつた瞬間びっくりしましたよ。

余計オポジションまみれなんですから。早乙女ハルナに綾瀬夕映に朝倉和美まで。

GPSでおっかけられたらしいです。

「セイバーさん。さっきのあれはすごかったね。」

私は、いつもの姿に、ただ、耳としっぽは隠してありますけど。セイバーさんは赤いGジャンにジーンズ白いTシャツという姿です。

「キャスターさんはセイバーさんと家族？」

「まあそうですね。ライバルともいえますが。ちなみに刹那も我が家の一員です。」

「じゃあ、姓はみんな桜咲？」

「違いますよ。」

ふーんとGコキに似た子があまり納得してなさそうに言う。

「これから行くところに我が家の代表というか大黒柱がいますから。詳しくはそちらに。」

関西呪術協会本部に入る前にカグラザカと子供が何か言っていましたが無視です。

だってここは、このかの実家ですから。

ご主人さまも起きてますから。そろそろ報告をしてほめてもらおうんです！

【side out】

【side イリヤ】

「イリヤ君起きて下さい。」

障子越しのその言葉で私は目が覚めた。

「彼らが、来たんですか？」

「はい、今結界に入りました。」

話をしながらも私は着替えをし、髪を整える。この白い髪は綺麗に解かないともつれてしまうのだ。

ううー。この髪の毛。綺麗なんだけど、手入れが結構めんどくさいんだよなあ。

「終わりました。」

全て終わると、こちらから障子を開けて長にと顔を合わせた。

「では参りましょうか。イリヤ君。」

詠春が腕を出して私をエスコートしようとする。私はそれにこたえ、腕に手を通しておく。

今日の私の姿は、濃いめの紫に金縁の長袖、袖口が絞ってあり金の十字の刺繍、肩に金ボタンの装飾のされた上に、薄紫のタイをし、白いスカートで下にフリフリのヒラヒラがついた服。そして紫のブーツは、履けないので紫の靴下。

そう。わたしがいちばん最初に出会った聖杯イリヤの服装をまねてある。

「ええ。詠春」

私たちは廊下を歩き、皆が通された部屋へ向かう。詠春は以外にも女性をエスコートするのが上手だ。無骨な剣士というイメージしかなかったがすこし改めよう。

先に詠春が御簾の外へ出る。

「お待たせしました。ようこそ明日菜君、このかのクラスメイトのみなさん。そして担任のネギ先生。」

「お父様ひさしぶりやー！」

「これこれ、このか、おまちなさい。もう一人紹介しなければなりませんから。」

このかは少し離れて何事かと伺う。

詠春が私に手を差し出す。さながら女王に差し出すように。みんなの空気が鎮まる。

「はじめまして。みなさん。」

そして私はその女王としての扱いを堂々と受けみんなの前に姿を現した。

「そして、お疲れさまでした。勤めを立派に果たしましたね。キャスター、セイバー、刹那。」

キャスター、セイバー、刹那には先に指輪で伝えてあったから、臣下の礼をとる。

他の人たちは何者かと疑う。このかでさえも、私がだれか覚えていないのだから。

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、といます。」

スカートの裾を持って、女性らしく頭を下げる。

「熾天の玉座 Offshore Throne of Heaven】の党首をしております。今回、東と西の調停の為に参りました。そして、その西の長の護衛依頼を長に頼まれ請け負っていました。」

うわー。みんな何もしゃべれなくなっちゃった。これってやばい？
声かけたほうがいいかな？

「ネギ君。親書を。証人として私が立ち会います。」

「あつ！ええつと。。。東の長、麻帆良学園学園長 近衛近右衛門から、西の長への親書です。お受け取り下さい。」

やっと思い出したのかネギは親書を取り出して詠春に渡す。

「……いいでしょう。東の長の意を汲み、私たちも東西の仲違いの解消に尽力するとお伝え下さい。任務御苦労！ネギ・スプリングフィールド君」

内容チラ見したけど、それってバカにされてない？

ツッコミしてーっ！！

みんな勝手に盛り上がってるけど、私は親書にツッコミしたいのを抑えてた。

「イリヤさんもいらっしやることですし、歓迎の宴をご用意します。泊まっていかれるとよいでしょう。」

ネギ君達お泊りけっいてい。

【side out】

第十一章 魔都と少女 3日目昼 後（後書き）

さて、イリヤ達のチーム名というかグループ名は

【熾天の玉座】に決まりました。

この名前が作者のお気に入りだったんで決めました。

正直に言うと【熾天の聖杯】とか【七天の聖杯】もいいかなーとか思ってたんですけど。やっぱり熾天の玉座ですよー。

お気に入り登録が200件突破したのでイリヤ、キャス狐、セイバーのプロファッブします

ではではこの辺で

第十二章 魔都と少女 三日目 夜前（前書き）

今回も長いっす。バトルあんましてないのに長いです。でわ

第十二章 魔都と少女 三日目 夜前

【side イリヤ】

私たちは家族でのんびりする暇もなく宴会に参加させられている。

セイバーとキヤス狐はお酒を飲んでいたが私は遠慮しとく。記憶なくなるといやだから。

刹那は友達たちと仲良くやっているようだ。今も隣で私に楽しかったことなどを話してくれる。

それが私はうれしくてしょうがない。

2年程会わなかっただけなのに。刹那の成長がひしひしと伝わってくる。

東の長への憎しみも比例してばしばし大きくなるけど。

「刹那君」

うわーくーきよめーえいしゅーんー。

「こ、これは長、私のようなものにお声を・・・」

長って、あんたの長は実際私だけどさー。

「ハハ・・・そうかしこまらないください。・・・この二年間このかの護衛をありがとうございます。私の個人的な頼みに応えよく頑張ってくださいました。苦勞をかけたね」

「ハッ、い、いえお嬢様の護衛はもとより私の望みなれば・・・」

もったいなお言葉。今回はセイバーさんや、キャスターさんに助けられてばかりで何もできずに……。」

「話はイリヤ君から伺っています。このかが力をセイバー君に使ったと。」

「ああ。余は自身にスキルをかけておいたからな。大丈夫だったのだが。死んだと見せかけて実は生きていた演出がこのかに全部取られた。」

くやしそうだが本当は嬉しくてたまらないのだ。通信で真つ先に連絡が着たもの。
寝てる最中にうるさかった。あれはすぐキレそうになった。

「このかが、余をルキアと読んでくれたんだ!!」と。

「だいたいこの後ろあたり、下手したら心臓を掠っていたかもしれぬ。それを完全に治癒してしまった。」

セイバーが左胸のすこし上を指さす。

下手したら心臓にあたっていた場所だった。すごい偶然というか、力だ。

「ほう、このかの力の発現のきっかけは君とのパクティオーかな？
ネギ君」

「おそろくは。」

「えっ」

子供がなんかあわてているみたいだが、それはむしむし。そこで私たちに話を振られた。

「もし。このかがこちらとのかかわりを望んでいるのであれば封を解き、彼女に本当の事を伝えて下さい。刹那君、イリヤ君、ルキア君、タマモさんお願いします」

ドンチャン騒ぎのなか、こっそり真名ばらしやがった。ノドカがタマモをみてやっぱりという表情だ。君は好奇心を殺す練習した方がいいよー。

カポーン・・・そんな音が似合う立派なお風呂に入る三人。私と、刹那とアスナだ。

「ふー今日は色々あって汗かいたからさっぱりする」

「ふふ・・・疲れもすっかり洗い流して下さいね。」

「そうそう。今夜は眠れなくなりそうだしね。」

「「え」「」」

私の爆弾発言で二人がビビる。

「だって、総本山の結界の回りでウロウロしてるんやし、なんか仕掛ける気あると思うよっ。」

「この広い家の外までわかるの??この広い風呂といい。びっくりしたわー。」

「ッッッミどころ違っつしよ!!」

「あ、それより、シネマ村ですごかつたらしいじゃん。敵剣士と派手にやり合ったってね。それに、イリヤスフィールさんの部下なんでしょ?すごいじゃん。キャスターさん達と一緒に。キャスターさんってなんかカミサマらしいし。」

なんか話ずれまくってる気がする。

「でもやっぱり刹那さんはこのかを護るナイトって感じだよー。ただのボディガードじゃないっていうか」

せったん、顔真っ赤で応酬。

「そそそ、そんなかんけいじゃないですよ!神楽坂さんまで何をっ」

せつとくりよくにかけるお。せったん。

私はさっさと湯船につかっつてのんびりしますか。

「そそーゆー神楽坂さんは・・・」

うざったいので耳からカット。めんどくさい。私は刹那に一声。

「刹那。ここじゃ私居るんだし、元の色に戻したら?目の奴も外して刹那らしい方が受けると思うよ。」

「う・・・はい。じゃあ明日菜さん、あとで話したいことがあるのでこのかお嬢様とまたこのお風呂場に来て下さい。」

「うん。わかった。」

その瞬間、男どもがこちらへ来る。

「二人とも、裏口から逃げるよ!!」

私は2人を裏口に行かせる。私も裏口から出ようとしたその瞬間、ネギたちが追いかけて来て鉢合わせ。

ネギ君は刹那のおっぱいモミモミ。そこを朝倉達に見られ、散々いじられましたとさ。

ちゃんちゃん。

せつちゃんはネギ君の所にお嫁いかないとねーw

そのあとしばらくして、私たちはこのかの封印をとる準備に入っていた。

もし彼女がこちらの世界をとらなければいまのまま封印しておく。そしてこちらをとるなら、ッ徹底的に指導しなければならぬ。

これはこのかの決める問題でもあり、刹那の自身の問題でもあり、私たち、熾天の玉座の問題でもあるのだ。

風呂場にて、私、セイバー、キャスター、刹那の三人が待機する。

刹那は白い髪に緑の瞳。私と少し似ている。よく見ると、私のは透明な白という感じだが、刹那は真っ白だ。

瞳の色は私は紅なのだが、刹那は淡い緑だった。

このかは神楽坂明日菜が連れてくるらしい。

その瞬間、決壊の破られる気配と何者かが侵入してくる気配がした。

白い少年だ。直感的にそう思った

実力からみても、ここの守護結界を抜けるのは白い少年しかいない。

石化の解除は後にしてとりあえず。このかを護らせないといけない。

「刹那イケ！子供先生護って遣れ。」

わかりました。

その一言で彼女は1つの剣となった。

風のようにかけるのは彼女自身の姿ではない。翼があれば、もっと早く彼らを……そう思うときもよくあったが彼女自身の決定。それを返すことは並大抵の努力じゃできない。

『刹那ですネギ先生見つけました。同時に長にも逢いましたが、長は石化状態です。とりあえず。学園長に電話させながら、そちらに向かいます。』

「OK。アスこのは？」

『先生のカードで状況認識してそちらに向かうとの事です。ガードよろしくです。』

「セイバー。明日菜だけじゃ心もとない。探せ。刹那と逆方向だ。」

わかった。

「マスター。どう出ると思います?」

「たぶんこのかさらって、途中で何人が置いて足止めさせつつスクナやろう。」

「ではセイバーさんが足止めで、私とマスターがスクナですかね?」
「かもしれない。」

「たぶんそうなる。」

セイバーとは違う方向から明日菜たちが息を切らせてやってくる。

「イリヤスフィールさん」

「イリヤでいい。誰かに逢ったか?」

石になった人たちだけだと悔しそうに言う。

「2人はならなくてよかった。」

「せつちゃんは?」

「ネギ君探しに行ったよ。向こうはこれから神降ろしを行うんだから。しかもその時の生贄がこのかあんたが一番適正有るんだから」

「あすな、ちゃんとこのか護れよ」

「イリヤちゃんさつきとしゃべり方ちがう。」

うを振り上げて白い少年が出始めたところの頭をたたき割りにかかる。

「あぶないな。」

彼の拳が石の剣となり、干将を止めていた。

「こんな風に襲撃されるのは久しぶりだよ。」

「君は何が何でもここで壊しておかなきゃいけないからね。私の頭せいはいが言ってるのお前だけは許すなとね。」

それは未来予測だろう。

「君となら楽しめそうだ。」

ああ。楽しめそうだ。修行してきたんだ。この10年。彼とは違う形でも。

「そうだ、お互いカンフーで勝負をつけるってのはどうだい？」

姿を現し終えたところで刹那とネギがやってくる。

「イリヤさん！！」

「邪魔しちゃだめです。今彼との勝負の真っ最中なんですから。」

「奏者。アレを……はあはあ……つかうのか？」

「ああ。どうするフェイト・アーウェルンクルスそれとも3番目と

読んだ方がいい？」

彼の目が一気に怒りに支配される。

「その名を呼ぶな！！ああ、いいよ。君の挑戦いくらでも受けて立つよ。」

『トレスオン スターティンケンセル セキュリテグリアクオリア データ インストール オン
同調開始・・・起動月の聖杯防御解除魂の情報化読み込み開始
コンプリート
李書文 完了』

インストールが終わって、私二刀を消す。

「君のその武器消してしまってもいいのかな？」

「今の私は李書文と同義だからね。さあ。かかってこい。」

彼が殴りにかかる。私はそれを打ち流し、さらに一步踏み込むみ、肘を打ち込む膝でガードされた。筋力とかアップしないので、スピードも変わらないか。でも功夫はチートだけど十分にある。彼の拳を避け。足を蹴り込み、何とも言えない流れるようなカンフー技に、他の人たちは啞然。そこで声を張り上げる。

「何をしている。このかを護って警戒せんか！！」

あんまり長いインストールだと口調や性格まで似て来てしまう。私の中の彼の経験が楽しそうに笑っている。久しぶりの虎に出会えたと・・・

虎に勝ちたい、でも長く打ちあって居たいそのような不思議な気持ちに心が動かされる。

「本当に李書文のようだ。こうなると彼の槍も観てみたいよ。」

「残念ながら、今日は槍の持ち合わせがなくてね、先ほどの双剣ならお相手できるよ？楽しませるといっつか負けない自信はある。」

「ならこれはどうかな!!」

その瞬間私たちの回りで石化の呪文が爆発した。

「トレスオン同調開始・・・アイギス!!」

アイギスの盾を作り出す。

かの有名な、アテナの持っていた鏡のように美しい盾。後にペルセウスに貸し出され、ゴルゴンの首がはめ込まれた。

石化に対する防御力は最高峰だという。

「みんな、息を止めて私の所へ来い。」

私のもとに集まったセイバーとネギ、刹那、キャスターは石化せずに済んだ。

このかは？

「じゃあ。お嬢様はもらっていくよ?」

そんな声が響く。

鬼が、このかを抱き上げ飛び上がる。

「いって……。アルビカント」

「イリヤっせつちゃん!!! 明日菜!!! いやっいやー!!!」

「ま、まちなさいっ」

明日菜がアイギスの下から出る、

彼女の服が石化するが他は平気らしい。

マジックキャンセル。上手く買えばスバラしい能力だな。

「このかは渡さないわよ!!!」

「むししていいから、いって」

「まて、このっ!!!」

石化の煙が消えたのでアイギスを消すと、次は水がやってきた。

そこにはポセイドンの三股槍

海を割ったと言われるほどの神宝をこともなげに投影する私

ポセイドンがその槍をむけると自然とその水が自分から道を開けるといわれている

その槍を振り下ろして道をつくり私たちの身を守る

水である以上かの槍にはかなわない。

私は槍を刹那に渡すと、中国拳法の構えをとる。

「お前は必ずここでつぶす。キャスター、セイバー、刹那、このか

をお願い」

「君は居るはずのないイレギュラーだ。僕が始末してあげるよ。」
なかなか言う小僧だ。しかしキミをここで足止める。それは今回の私の仕事らしい。

「ネギ君も、ついて行って。後の作戦は任せる。無力化したらこっちも向うから。あと石化は後で直すから。安心してて。」

私は白い少年に殴りかかった……。

【side out】

第十二章 魔都と少女 三日目 夜前（後書き）

どうでしたか？

これから先は作者もまだ考えてないです。
きまぐれです。

では次回をおたのしみに……………

第十三章 魔都と少女 三日目 夜 後（前書き）

やっとこさ上げても上手くいかなかった感じがする

でも、一生懸命がんばりました。
読んで下さると幸いです

第十三章 魔都と少女 三日目 夜後

【side キャス狐】

「明日来るといふ、応援が来ればあんたらは終わりですよ？」

敵は私たちを待っているようでした。

水面の上について、このかの口には呪符を張り付けじゃべれないようになっっていました。

「あの祭殿までいけばこっちのモノや。応援も、西洋魔術師も全然こわないで！！」

白い元の姿の刹那は、このかから身を隠すように私たちの後ろに控えます。

「それよりも、あんたらにもお嬢様の力の一端をみせたる」

このかを抱いているおさるの着ぐるみが一步前へ出る。

「まさか！！」

「ふふ。失礼します。お嬢様」

呪符をこのかにはりつけ、唱える。

「オン」

耳にはそう聞こえるが、実際は呼び出している。このかのちからを

つかって。

「そんなものに頼らないと何もできないなんてね。今どきの陰陽師はヘタレですねー。」

わたしが一步前へ出るで、詠唱をかぶせる。

「軒、坤」

私が2つ唱えると、全ての術式が中断されてしまいます。

「私の名前を聞けばあのスクナを持っても止められません。まあ、聞く気もおきないでしょうけど」

そこでセイバーが前へ出ました。

「キャスター。ここは余が受ける。さあ天ヶ崎とやらいくらでも鬼を召喚してみよー!!」

「くっ・・・オン！キリキリ！ソワカ」

苦し紛れに召喚した数。そうはいえない。奴もなかなかの術者出ないのはわかります。

「あんたらはそいつらの相手をしてればいいわ」

先ほどの倍の数が出た。それと同時に奴らはその場を立ち去った。

奴らの目的は祭壇、そこに行くにはこのメンバーなら2ルートある。

「神楽坂、キヤス狐といけ。刹那はせつかく飛べるんだ、ネギと空からだ。」

セイバーさん、それ私の台詞ですよ・・・。

「はい!」

刹那は少々ためらいながらも、翼を開く。

「綺麗。ね。」

「すごいです。刹那さん。なんで隠してたんですか？」

「是のせいで村を追われたんです。そこでイリヤさんに拾われて。ただそれだけです。」

「いりやちゃんも白いもんね。」

それに、学園通つのに白かったら目立つというのもあるのだろう。

鬼がじわじわと迫ってくる。

セイバーの牽制で、今のところはおとなしくしている鬼達。いつ動き出してもおかしくない状況だ。

「それより早く行け。余の技に巻き込まれたいか？」

「では、セイバーさん後ろを任せましたよ。」

明日菜さんが背にしがみついたのを確認して私は走り出す、後ろではなにか金色が見えてたけど気にしてたら巻き込まれる。

刹那さんとネギ君は空へ舞い上がって、あの光る柱へ向かう。
スクナを開封はじめたらしい。

【side セイバー】

余は、自分の舞台を作り上げる

「レクナム regnum カエロラム caelorum エト et ジエヘナ gehenna・・・
・・・我が才を見よ・・・万雷の喝采を聞け・・・築かれよ、我が
摩天！ここに、至高の光を示せ！座して称えるがよい・・・黄金の
アエストゥス ドムス・アウレア
劇場を！！招き蕩う・黄金劇場」

キャスト達が離れたのを観て余は宝具を展開する。我が至高の芸術。余の生涯を彩った宝具。
観客は大量にいるな。過去最高かもしれない。

「ゆくぞ！ ラウス・セント・クラウディウス 童女謳う華の帝政！」

魔力が尽きるまで、ラウス・セント・クラウディウス 童女謳う華の帝政を使ってやろう。
なんせ1000や2000では聞かきかぬ数。だからこそ、余の華々しさ、美しさ、猛々しさを語って遣ろうではないか。

そこへ魔力の込められた弾丸がやってくる。

「お主は・・・龍宮と古ではないか！味方か？」

「まあね。この金ぴかは貴方かい？先ほどの質問なら、東のジジイに手助けしろとね。」

「あいやー金ぴかあるね。セイバーさんといったかね後で手合わせするアルネ。」

2人の人間がやってくる。どちらも余好みだが、余は今奏者一筋だ。

「ライオンをふんどし一丁で殺せるようになったらな。」

「ならやめておくアル。それ以上に大事なもの泣くしそうアル。」

「余はやったぞ。あれはまたなつかしいぞ。まあそれは置いて。龍宮、お前は後ろからだ。古は龍宮護ね。あとは余が相手だ。」

再び大量の魔力を使い技を放つ。

ラウス・セント・クラウディウス
「童女謳う華の帝政！」

「すごい技アルネ」

「ああ。なかなかすごい。」

「天幕よ、落ちよ！
ロサ・イクトウス
花散る天幕！」

余は無理をしないように順調に数を減らす。

そこに、月詠がやってきた。

「セイバーさん。楽しそうやわあ。ふふふふふ」

「こちららせていいか？」

「いいよ。学園長に追加請求しとくから。」

余は、月詠と剣を合わせる。

二刀対一刀は圧倒的に一刀が不利だが、それでも負けるわけにはいかない。

「やっぱりええ剣筋なこと。セイバーはん。ほれてまいそうやわ。」

「余には心にきめた奏者が居るからな。余を奏でられるのは奏者だけだ」

「いけずやわあ。ウチにもかまってえな。」

「構ってるわけはないしな。」

「あああん。もっとしましよう？」

剣を重ねるたび離れるたび、攻撃するたび、護る度、うざい。余には奏者しかおらぬのだ。

「二刀れんげき、ざんがーんせーん」

「斬岩剣！！」

余も神鳴流は一通りマスターしてある。

彼女との違いは、余だけにしかない剣技だ。

「さあ、踊ってもらおうぞ！バリディーヌ・ブラウセルン喝采は万雷の如く」

【side out】

【side イリヤ】

もう何合打ち合ったかわからない。

「二の打ちいらすの看板を下げないとなこれは。」

ふたりともくたくただった。

「さすが勉強になったよ。『李書文』」

「カカカカカ！！若造。なかなかやるではないか。わしもなかなか楽しめた。今回はこの辺で分けにして置かぬか？」

二人して周囲の被害を考えずにやるもんだから。あとで詠春泣くかな？って石だから泣けないかも。

「貴方の方が全然余裕でしょうに。」

「ワシ自身はな。このわしを下している少女だ。だからこの辺でわけにするというのだ。」

しろいかみのしょうねん。わたしはやつをころさなければ。動いて

いるのはその頭せいはいだけだ。

「わかった。それじゃあね。李書文。あなたとてあわせできてよかった。」

白い少年は消え、私の中の李書文が消えた瞬間。私は一気に体が軽くなった、

次は。早さの英霊で・・・いくしかない。しかし、負担を考えると、イリヤに縁のある英霊がよさそうだ。

とっさに思いついたのはメドゥーサとイスカンドル。どうせなら女性でということだ。

「ライダー。それも、メドゥーサを・・・」

スターティングムーンスル
起動・月の聖杯・セキユリテイ防御・クリア解除・クオリア魂の情報化・インストール読み込み開始

メドゥーサ

コンフリット
完了

両方の目を開けると、廻りが石となる。とりあえず。眼帯を投影で出すと目に装着する。

「これはまた面倒な場所に呼ばれてしまったようですね」

首にくぎを刺し、血で魔法陣を描くとペガサスを呼び出す。

「いきましようか。こんな呼び方しかできなくてごめんなさいね。」

真っ先に光の塔の方へ向かう。

ネギは、あの犬と一戦やり合っている。刹那は無視してお嬢様の方

へ向かう。

横で追いついてしまった。刹那まだまだ翼のコントロールが出来ない。

宝具を使っていない状態のこの子ヘカサスに負けてしまうのだから。

「せつな」

「イリヤさん。」

「今はライダーって。呼んで。とりあえず詠唱完了しても大丈夫みたいだね。ほら?」

森の中の一点を指す。それはどんどん祭壇へと近づきつつ私に信号を送っている。

スクナを従わせますが、私はご主人様一筋ですから!!

そこまで強調しなくても、キャスターが私に思いを寄せてくれるのはうれしいし。わかってるし。

「了解」と信号を送っておく。

私たちは天ヶ崎とこのかだ。

「刹那白いのが嫌なら幻術かけようか?」

「いえ。イリヤさんを観てて私も決心がつかしました。」

「それに巻き込んだじゃったし。私のせいで」

私はここぞとばかりに溜まっていたものを吐き出す。

「私はこちらに巻き込まれたのは確かにイリヤさん達のせいかも知れませんが。でも、こちらに居続けたのは、自分の意思です。ですから……だから……」

「ごめん。せつな野暮なこと聞いたね。」

今近づけたなら頭をなでていただろう。

「じゃあ、刹那。このかを頼む。私はあの鬼をぶち壊してくる。」

スターチユーンゲ マギ&ウィザード
開始同調・魔術回路1番2番

サモディクスウステインゲ
同時起動・月の自動書記装置一 moon cellular
tomata 《ムーンセルオートマートン》
インストール オン
読み込み開始
コンソール
エミヤ
完了

一月輪の侵食《エルージ ナウザリング アラウンザム・
ン》Erosion of the ring around t
he moon

瞬間世界が変わる。ムーンセルの中枢にある棺の部屋。あの時はト
ワイスがいた。しかしこの世界の中心は私。

中枢の近くなので、私にかかる負担は最小限。棺の中央に座るのは
私。英霊を降ろした痛みはなく私は、フクサキウ 彼になる。エミヤシロウ
キヤスターは懐かしそうに。

千草は、わけがわかってない。明日葉はもうどうにでもなれという
感じに見えた。

「ここは、わが世界。さあ客人。粉々にされる覚悟は十分か？」

「早速いくぞ。我が骨子は捻れ狂う

カラドボルグ？
“偽・螺旋剣”」

いきなりのカラドボルグ。足元を狙ったとはいえこのかは大丈夫だろうか？

「次々行くぞ。赤原をいけ！緋の獵犬！！」

次は左足をねらった。

刹那が、このかを助けたのを確認。

「そのこの白いの。私にもこの祭りに参加させる。」

それは金色の吸血鬼だった

さらに後ろから結界弾。そして、すぐ直後に詠唱が聞こえる。

「ト・シユンボライオンテイナー 日本モイタハヒスアリ・ネ
イク・ラク・ラック・ララック・ライラック・契約に従い我に従え氷の女
イシア
王・とこしえのやみ《タイオーニオンエレボス》・えいえん《ハイ
オーニエ》のひょうが《クリュシユタレ》」

「おいそのの、ちび吸血鬼。私の出番を残しておいてくれないか？
そうすればあなたの悩み解決しよう。アナタシア・キテイさん」

「！！！！おまえ。面白いこというな。なら、やって見せる。」

「鶴翼、欠落ヲ不ラズ（しんぎむけつにしてばんじゃく）」

「心技、泰山ニ至リ（ちからやまをぬき）」

「心技黄河ヲ渡ル（つるぎみずをわかつ）」

「唯名別天ニ納メ（せいめいりきゆうにとどき）」

「両雄、共ニ命ヲ別ツ（われらともにてんをいだがず）……！」

「ブローケンファンタズム
壊れた幻想」

「ブローケンファンタズム
鶴翼三連に壊れた幻想」

「これでなら大丈夫だろう。」

「お前、転送系の魔法使いか？」

「いや。ただのチートだ。イリヤスフィールという。」

「そこにキヤス狐登場。」

「キヤス狐。今のうちだ。早くスクナの暴走を止めて自我を起こしてやれ」

「一応言っときますね。やりたくないんですよー。本当は」

「そこを頼むよ。今度膝枕でどう？」

「乗りました！ついでに耳搔きもですからね！！」

キャスターは明日菜を背から降ろすと化ける。

いや。化けるのではなく、もともとの姿『玉藻の前』の姿へと戻るのだ。

「お久しぶりです。飛騨の両面さま」

その声に、スクナが煙にまぎれて現れる。それは人の大きさと大差なかった。

「おお。その声は那須の玉藻殿。お久しぶりでございますな！」

なんか言葉を丁寧にした筋肉達磨みたい。

「以前のお話の件考えてくださいましたかな？」

「いえ。私には仕える主様がいらっしやいます。そしてその方を好いております故。お気持ちはありがたいのですが今回は……。」

ちらりと私を観る。目があっってしまうと何故か顔をそらすのは気のせいかな？

スクナの姿は鎧甲冑に身を包んでいた。それは神々しささえ感じられる姿。

「それは申し訳ない。しかし、そなたがそれほど言う主とやら、どれほどの御人か。少々気になるな。」

二人の話はとんとん拍子にすすんでいる？

「ねえキティ。あなたも私達に入らない？最低でも七人は強い欲しいんだよね。」

だって、セブンスアートグラフって二つ名を名乗れないし。だって私、キャス狐、セイバー、刹那、スクナ、エヴァ、あとはこのかにかっちに付いてもらおうかな。」

「私がそちらに着いたとして対価はなんなのだ？」

さすが。キツチリしてらっしゃる。

「結界の改変とのろいの解除」

「できるのか？いますぐやれ！」

「く・・・首は苦しいで、一応これは取引だよ。十分な材料でしょう？どう乗る？」

「いやキサマの魔術がまだ謎だ。それにあのスクナとはなしておる者の正体がな。その情報もだ」

「それは仲間にはいればしぜんとわかるよ。」

「そうか。ならばそちら側についてやっても好かろう。ちなみに目的はなんだ？」

「今回の目的はねえ・・・。東に先入するために実績が欲しかった

の

生半可な実績じゃあタヌキジジイに使われるだけだし。

「【熾天の玉座 Offshore Throne of Heaven】の名乗りあげの実績にスクナを倒すって立派じゃない？」

キティに説明していると玉藻から声上がる。

「ご主人様。スクナがご主人と一騎打ちで勝てたら、臣下になると。」

「わかった。キャスターはキティとまっつて」

「キティ言っつな！！」

「はじめてお目にかかる。両面宿儺命と申す。玉藻の前をかけていざ尋常に！！」

「最初から私のなんだけどね。自分からデリバリーにやってきたし。」

私はまだ続いている幻想の中で、彼をインストールする。

「スクナの神よ。臣下に下る準備は十分か？」

「お主のその物言いは面白いな。」

互いにに剣を合わす。

左右の干将・莫耶は私の手になじんでしまっていた。もう、体の一部も同然。

二つで一つの夫婦剣。私も少しあこがれる。自身を犠牲にして刀を打った干将と莫耶。

そんな二人の夫婦愛を手に持つ私が負けるわけにはいかない。

幾たびの戦場を越えて不敗

ただの一度も敗走はなく

ただの一度も理解はされない

そんな男の唯一になるかもしれない理解者に敗北は許されないのだ。

剣が打ち合う音が連続音に聞こえるような剣劇の嵐。

幻想の中で。私は剣を真上から打ちだす準備。両面の神なので、死角は少ない。あるとしても真上。

「
トレース・オン
投影、開始」

さらに奥の手をつかう。向こうは四つ手、ならばその倍の策を弄するまで。

「
憑依経験、共感終了」

「
ロールアウト バレット クリア
工程完了。全投影待機」

「
フリーズアウト ソードバレルフルオープン
停止解凍、全投影連続層写・・・!!」

投影を打ち出す。でもこれでも耐えられるのはわかっている。

「
トレース・オン
投影、開始」

「
トリガーオフ
投影、装填」

「
セッ
ト
全工程投影完了」

「
ナインライフス フレイドワークス
是、射殺す百頭」

投影を全方位からして初めて勝てるような相手。

敗走しない為の。唯一の戦いともいうしかなかった。

「はあはあはあ……」

「ワシのまけだな。ここまでやられるとは思わん。」

スクナの姿をみると。四つの手にそれぞれ剣が刺さり四つの足にも剣が刺さっていた。

姿も手も封じてしまえばこちらの勝ちである。

辛勝ではあるが。

「ワシも神としての一面を持つ者。その神殺しをやって見せるとは、タマモが懸想するわけよの。」

棺の部屋が消えていく。私の幻想は終わりだ。エヴァも降りてくる。

スクナが臣下の礼をとる。

「是より、わしの手も足も全てお主に捧げよう。イリヤスフィール」

「貴方を我が臣下と認めましょう。最初のお願い聞いて下さいますか？」

「もちろん。」

「総本山で石化した人々を直してあげて下さい。」

「はい。ただいま。」

そういつて彼は総本山へと向かう。

「エヴァ。貴方はどうする？臣下になるの？それとも」

「臣下にはならぬ。ただ。お主と共にあるのはたのしそつだ。」

エバちゃんツンデレキタコレ。

「じゃあ、相棒ならキティって呼んでいい？？」

「その名を呼ぶな！！」

しがみついて首を絞めてくる。

「ご主人様にそんなことしないでください！！」

「奏者・鬼達が消えたぞー！！」

セイバーがかけてくる。天ヶ崎も術を解き、このかの呪符も剥がされたらしい。

「イリヤちゃん。うち、せつちゃんに少し聞いた。ウチの事。やっぱり封印解いて、大切なこと忘れてウチだけ平和に暮らすんはいやや。」

「んー封印解くのはいいけど。また今度にしましょう。じゃあ。天ヶ崎を連れて、ホテルに戻りましょう、今日はスイートをとってあるから。」

肝心の天ヶ崎捕獲は、

「セイバー。天ヶ崎を拘束しといてね。キャス狐はスクナと一緒に石化を直してきてね。ホテルは、最高級ホテルってとこだから。」

そう言っただけで今日は別れることにした。

正直しんどいから。

だって。睡眠不足なんだもん

【side out】

第十三章 魔都と少女 三日目 夜 後（後書き）

セブンスアートグラフ、フラグをどうやって建てようか考えるばかりであんまりうまく書けません。

今度はもっとうまく書けるように頑張ります

8 / 3 1 改訂。

もう少し場面描写増やしました。足りなければ言ってお下さい。でわ

第十三・五章とその後の少女達（前書き）

今回は細かな描写はしてませんがまるっきりR指定モノです。

覚悟して下さい。

おふざけが過ぎました。

勇気のある方がなばっててなさい

第十三・五章 その後の少女達

【side 千草】

それはウチが必死に逃げても追ってきた。何かあるかはわからへん。あいつからもらった札があるがそれを使う気はせん。

「天ヶ崎千草。待てと言っておろつ」

いつのまにか赤い服を着て大きな赤い剣の金髪。

「赤い露出狂！！何のツ用や！！」

「奏者から、札をもらっておるだろう。それで連絡してみる。お前の道が開けるかもしれぬし。それとも、余と共に奏者の所に行くか？」

赤い露出狂はパンツ丸見せのいつもの恰好でウチに言った。

「なあ。あんたらがウチらに恩売ってなんかいい事あるん？」

「それは奏者の考えだ。余は知らぬ。」

そんなむちゃくちゃな。

「とりあえず。余の休んでいるホテルへ行くぞ。」

おもむろに近づいてきたかと思うと、帯の所をがっちりホールド。そのまま肩に担ぎあげられて連れて行かれる。手足をばたばたさせるもあまり意味のないことなのであきらめ。

血染めの雪がウチに何の用なんか気にもなる。もしかしたら寝首もかけるかもしれんし。

【side out】

【side イリヤ】

「お疲れ様セイバー。」

セイバーに頼んでいた天ヶ崎千草捕獲は簡単に済んだ。天ヶ崎が人を信じる人でよかった。

渡しておいた呪符に位置把握機能が備わっていたのだ。早い話がG P Sよ。

「で、なんでウチをここに連れてきたん？」

「んー。眠いから。とりあえず寝ましよう。明日話すってことで。」

「一緒寝る？」

「やめとく。あの赤いのに殺されそうやわ。」

なら、この部屋から出られないように結界を張っておく。トイレも風呂も着いた最高級スイートルームなので平気だ。

「風呂はあそこ。トイレは隣。このスイートルームからでなければ自由ね。それじゃ。」

セイバーが一応しておいた拘束を外してやる。

「セイバーシャワー一緒浴びよっか？」

「よいのか？奏者。余と一緒に浴びて。」

「おいで？ルキア」

駄目押しの幼名呼びで、ルキアは陥落。玉藻は一晚じっくり相手してあげれば十分かな。

ルキアでためさせてもらいたいモノが一つある。

聖杯の記憶から投影したモノで、なかなかによさそうだ。

お風呂でじっくり時間をかけてチャレンジしてみますか。

聖杯の記憶だから大きさも自由自在。楽しみだ。

【side out】

部屋に降ろされたうちは、大した拘束もされず、半分自由の身らしい。

ウチはどうなるのか解らん。もしかしたら、あの白い奴のおもちやに……。

いや、ありえへん、ありえへんから！！アイツ女やし。

それにしても、お風呂場から聞こえてきたカン高い声が気になるのはウチの気のせいかな？

ウチは、ソファでも借りて寝ることにする。あいつらの後の風呂は入りたくない。

嫌な予感しまくりやし。

「ねえ。東に復讐するチャンスがほしくない？」

目が覚めて一番に聞かれた言葉やった。

「したい。うちは、東の魔法使いに親殺されてひどい目にあわされてん。」

「私に従うならその機会をつくる。どう？悪くない取引でしょ。」

「あんたに従えば、ウチが恨みを持つてるやつに復讐できるンか？」
「そう。しばらくは東におせっかいになるけど必ずそいつを見つけ出してあげる。貴方とは違う方法で。」

ウチの心はきまった。

「わかった。あんたの部下になる。」

白い女はウチに手を差し出す。西洋風にやれとのことらしい。

「天ヶ崎千草。復讐を遂げるその時まで主人とともにある事を誓う。」

白い手をウチの両手で包み込むように持つと、その甲に口づけする。するとその手が私の顎をつかみ顔を向けさせる。鼻先？で止まる。甘い香りが漂い、その紅い瞳に吸い込まれる。

「私の名前は、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。でも人前ではアインツツって呼んでくれるかな？」

「はい・・・アインツさま・・・」

もう、何もわからんようになって、ウチは、唇を奪われて。そこからは記憶がない。

気がついたら、ベットに寝かされとって、何も着てなかった。

何があったんやろつか。

でもアインツ様は、ひどいことはせんかった。それだけは覚えとる。死ぬほどやさしくて、いじわるやった事だけは覚えとる。

【side セイバー】

風呂の間、余は奏者に求められ、くたくたになったというのに、奏者は満足できなかったようだった。

新しくとらえてきた千草相手に一晩中……。

アインツと呼ばれていた。

余には説明あったが新しい名らしい。

本名がばれると呪術的に良くないらしいので、イアインツ・フォン・スフィールと名乗るそうだ。

余が、奏者に負けたのが悔しくてならない。今宵はキャスターも戻る。絶対に奏者に参ったと言わせて見せるのだ。

【side out】

第十三・五章 その後の少女達（後書き）

申し訳ございませんでした。
つなぎ兼、ふざけです。

思いつきりふざけてみたかったです。
申し訳ございませんでした。

ちなみに。
キャス狐は自分的に本命なので、きっちり書く。。。。
かもしれないwww

でわでわ

第十四章 壊した少女（前書き）

「今回も」R指定表現を含みます。

あと、応援して下さる皆様には申し訳ないのですが、私は私の読みたいものをつくっています。

自分自身が読みたくないものに力を注げるわけがないというのが持論です。

なので、万人受けするつもりは毛頭ないです。
応援して下さい方は私と趣味が似てるか考え方が似てる方ということとで。

辛辣な意見を下さった方が居たので、この場で言わせて頂きました。

R指定警戒の空白部分埋めでもありません。

次回からの様子わかる今回。再びぶっ壊れて書きました。
ぶっちゃけいならエロエロが足りないのでエロエロメインで書いたらこうなっただ！！

ええい！！投稿しちゃいます。

でわ。 勇気のある方。 御覧下さい

第十四章　壊した少女

【side イリヤ】

それは早朝の事だったらしい。

刹那が私たちの所へ逃げようとしたのだが、ネギ君やこのかにつかまっで結局は麻帆良に残る事になったらしい。

あと、西長のつくった身代りがめんどくさかったらしいよ。

で、そのころ、私と西と、東の長のお話をしました。

私の恰好はさつき色々あった時のまま、バスローブというものだが、他の二人はしっかりしていた。

「つまるところ、今回のは、我ら東の警備がしっかりしてないことを示唆するデモンストレーションとやらだったということか?」

「そうですよ。ねえ？千草」

「はい。全てはアインツさまのおっしゃる通りです。」

傍らに千草を侍らせ、キャスターとスクナはまだ石化の治療に追われてるみたいだけど。

「西としては、彼らの動きは全く知らず、私自身も石化にやられてしまっていた状況です。」

「スクナの開封を同時にしたのは悪かったし、もうすこし信頼できる人を雇えばよかったわ。月詠とフェイトという異分子を入れずにね。」

千草の腰を抱き寄せると彼女は真っ赤になってしまう。

彼女自身まだ終わっていないような余韻に悩まされているらしく、私が近づくだけで反応してしまう困った状況だった。

「そうじゃのう。フェイトという少年が入り込んだのはとても由々しきもんだいじゃな。」

「それは大戦期の敵情報を徹底的に秘匿した、MMMの責任であつて、私もそのような裏側のある子でしたら引き入れたりしませんでしたね。私たちはまだ歴史の浅い組織。そのような古い情報は入ってきませんから。」

あくまでも、大戦期の情報を秘匿した為にフェイトが入って暴走を起こした揚句に石化拡大がひろまったという風にしておく。

そうしたほうがいいもんね！。

「そういえば、犬上小太郎の処遇は？」

「それもこちらで行います。彼も我が【熾天の玉座 Off shore Throne of Heaven】の一員ですから。」

「じゃあ、これまでの事はここまでにして、これからの事を話そうかの。」

「そうですね。」

千草の背中をなでまわす。ちょうど長達には見えていない。お互い水晶球と呼ばれるキャスターの作った呪術品で通信しているからだ。

「まあ、石化の賠償は、石化の治癒法と石化自体の治癒で。それと

は別に、今回の全員の命の代金として、このかを我が【熾天の玉座
Offshore Throne of Heaven】に入れ
たいと思っています。もちろん本人の意思を確認してからですが。
そしてその場合、麻帆良学園にこちらからの護衛を増やす許可と手
配をして頂きたい。」

というか。

本人の意思は封印を解きたいと言っているのもう【熾天の玉座
Offshore Throne of Heaven】に入るし
かないのだ。

だって封印をしたのキャスターだし。場所は私とキャスターしか知
らないし。

明日菜を使えば簡単だけど、封印の場所がわからなければ意味がな
い。

そういうこと。

つまり。私たちは東に移動する事が目的で。

それをうまく運ばせるためにこれまで動いてきた。

「西としてはこのかがそのように望むのならお願いしたいものです。」

「

「むむむ・・・わかった。その場合、学園広域指導員と管理人とい
う役職としてお迎えしようそれなりに動きやすい役職だと思うから

の。」

「その場合としてもう一つ。その時は、護衛とこのか、つまり管理人とこのかと刹那を同じ部屋にしてほしいですなので、隣同士で部屋ほどお願いしてもよろしいですか？」

「それは難しいの。寮自体も改装せねばならぬし。」

「雪広嬢のときは行ったらしいではないですか。」

「あれは、むこうが……。」

ジジイごねる。

「もちろん。こちらで全額負担します。安いものでしょう。このか達の部屋割変更と、新しい職員なんですから。」

「むぬぬぬ。わかった。こちらも要求をのもう。しかし、このかの気持ちを最優先させることを約束してくれぬかな？」

「貴方より安心ですよ。本人の許可なくお見合いさせる祖父よりはね。」

ぐうの音もでないジジイ。

いやー。ジジイイジメは楽しいね。楽しすぎて。思わず千草に天国見せちゃいそうだよ。

「今回はの話し合い、これでいいですかね？」

西が締めにかかる。

確かこの後、エバ達を案内しなきゃいけないらしいからね。

このかの封印はゴールドンウィークをあけてから、開封する事になると思う。開封すれば彼女の世界は一変する。

その前に日常と平和を楽しんでおいてほしい。

「そうじゃな。ではこれで占めとしよう。」

「それではしつれいします。」

私は真つ先に水晶球の通信を切る。

私の足の間で千草がおねだりに必死なのだ。

「アインツさまぁ。もう。ここが……」

してほしい事を自分で示すように教え込んだのは私だけど。是見たら、キャス狐に殺される。

早く、満足させてあげよう。

【side out】

第十四章 壊した少女 (後書き)

壊した少女 〓 イリヤです
壊された人 〓 千草です。

彼女ってエロしか思い浮かばない私。

セイバー？何それおいしいの？WWW

では

今回はこのへんで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3368v/>

白い少女と異世界の魔法使い

2011年9月2日00時55分発行